

324
608

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



36.10.23

324-608

基督再臨説を排す

大正
8.9.26
内交

序 言

基督教は基督の有形的再臨を主張する人々の説くが如きものにあらざることを明白にせんと欲して私は此小冊子を公にする。基督の有形的再臨の如き信仰が今日の世界に人に顧みられ其の問題とならんとは私の全く豫期せざる所であつた。其故此の問題が起つてから諸方面の友人より屢々意見を徴せられたけれど、私は久しく其に關係しなかつた。然し右の問題が意外に世間の注意を引き出したので友人の勸に從ひ一篇の論評を書いて其を「神學評論」に送つた。私は其で一應言ふべきだけは言つた積りであるし、問題も間もなく決着するであらうと信じた。豈圖らんや論争は益々不純の内容を増加し充滿し來つて、岐路より岐路に入り、甚だ混亂し且つ望ましからぬものとなつた。之に向つて截然たる裁斷を試み、論決を與ふるは基督教を信仰し其の宣傳に從ひ、神學哲學の研究に身を委ねて居るもの、義務だと思ひ出した。ましてや有形的再臨説の如きは、内には我國の基督信徒の如き宗教的素養のなき者を蠢惑し、外には世人に向つて基督教を誤り、彼等をして基督教の無理有害到底信すべからざるを思ふに至らしむるものであるをや。そこで再び友人の勸告に從ひ、先に書いた評論を上梓せんとしたが、覆讀して尙意に滿たぬ所多く、終に全く稿を改めて仕舞つた。

實は此の論評は餘りに力を用ゐすぎた。再臨説くらゐに對して斯程の徹底した論評はいらぬのである。後世の人が見たら、著者も價なき論争に釣りこまれたものかなと評するであらう。然しながら二十世紀の第二十年の我國には遺憾ながら尙かゝる物を要することが事實である。

宗教も組織である。首尾があり本末がある。吾人の各自は基督教について、基督教とは其の全體がこんなものだと思ふ組織を持って居なくてはならぬ。私は自分の組織に照らして再臨論を批評した。唯だ一點だけについて議論するならば、どんな事でも理屈はつくだのである。が其は無責任である。其故もし再臨論者が私に答へるなら、また基督教は全體どんなものかを考へ、其の組織の一部として再臨を考へた所を以てせんことを望む。

此小冊子が再臨説に由つて誤られたる基督教の眞面目を披明し、世間の人々の惑を解き、基督教徒の危疑を去り、又再臨信者の迷を開き、人を信仰に入らせるの一助ともなり、基督教の發展と感化に些少の用をなさは、私は其を此上もなき幸福と感ずる。

大正八年梅雨の候

著者

一 緒 言

基督再臨といふことは端なくも我が教界近時の問題となつた。主唱者も反對者も共に非常なる熱情を以て互に論争して居る。昨今に至つて益々枝葉にわたり岐路に陥り、問題の實質はいよく捉へ難く、議論はいつ果つべしとも見えぬやうになつた。問題が其自身に於て何程の價值あるやは疑問であるが、再臨説講演には相應の聴衆が集まり、宗教の經驗乏しく、神學哲學上の素養のない人は、多少之に就て惑ふものもある由であるから、私はこゝに基督再臨の問題の性質を明にし、其の眞理を究め其の是非を論評したいと思ふ。此れは私如きものゝ果さねばならぬ義務であると信ずる。

基督再臨とは何を意味するか。基督教徒が救主と崇め神の獨子と信ずる耶穌基督が、やがて再び天より降り來るといふ信仰である。耶穌は曾て一たび此世に降つた。猶太のベツレヘムに生れて人間の一生を送り、人類の救のために苦勞し、終に十字架にかけられて殺されたが、三日目に復活し、四十日目に天に昇り給ふた。然し天に昇つて其より永劫基督教徒と離れて仕舞ふ者でない。再び來つて基督教徒と共に在るべきものである。といふものが此れ即ち基督再臨説の骨子である。

此の信仰は基督教會の初代より存在した。聖書の書かれた時代にも強く信徒の間に信せられて居た。其で聖書の各文書の中には此の思想が頗る豊に出て居る。基督の直弟子に次いだ時代にも強く信ぜられて居た。三世紀頃から希臘思想のために壓せられて漸く衰へたが、其でもなか／＼全滅はしなかつた。羅馬教會が盛となり、アウグスチヌスの神學が行はれて以來、神の國を教會だとする思想が

一般となつた、め、従つて基督が再臨して神の國を立つるといふ信仰は掃蕩されたやうになつたが、其でも此の信仰は常に教會の影の方に存在し、時として其が盛なる力を以て表の方に噴き出だした。十六世紀宗教改革後も再臨の信仰は矢張消えては居らぬ。宗教改革者は之を重大な信仰とはしなかつたが、また否定もしなかつた。今日に至るまで多數の基督信徒は基督の再臨は何等かの形に於て必ず有るものと信じて居る。唯だ其を基督教信仰の重大點だとも中心點だとも思はず、心の隅に藏めて居るまでである。従つて、再臨の信仰は基督教といふ一大宗教の或る片隅の一部として認められて居る。其を心の中心に持ち出して信仰の最も大切な所に置き、汎く基督教宗教の中心點に持ち出して、基督教は基督の再臨を主眼とす、必ず之を信ぜざるべからず、之を信ぜざるものは基督よりも此世を愛する者なり、教敵なり、異端なりと唱ふる一部信徒が、即ち再臨派なのである。

されば再臨説の由來は實に遠く、其の基督教に於ける根據は深く、其の教會史に於ける存在は恒久的である。此が再臨説の掃蕩され終らぬ所以で、二十世紀の時代に尙其の維持者を有する所以である。加之、再臨説の盛に興るときは、必ず其の背後に時代の要求があつて之を呼び起し之を刺戟するものである。基督教會の初代に再臨説が固く信ぜられたのは、羅馬政府の迫害が甚だしくして、基督信徒は常に不安の状態の中に在り、且つ恥辱苦痛多くして寧ろ死するを優ると考へる位であつたので、斯くの如き状態が長く續いては耐つたものでない、基督は近き内に必ず再來して信徒を救ひ敵を壓倒すべしと考へた、めである。再臨を信ずるときは必ず基督が再臨後其の信徒の國を支配するを信ずるものであるが、此の基督の支配即ち千年統治を信ずる者も、世界の腐敗、教會の俗化が極まつた

時には必ず起つて居るが事實である。そこで再臨派が割合に力を帯びて來るのである。本來を言へば何時の世とても人は理性を有して居るから、再臨説などに耳を傾ける者がありさうに思はれぬが、事實其に反して多少でも其の仲間を有するのは此の理由からである。

今度の大戦争が起るや、西洋には再臨説が頭を擡げた。英國でも日外牧師及び信徒の同志が基督の再臨近づけりといふことを唱へて趣意書を發表した。中に一二知名の人もあつた。其に對してそんな迷妄を唱ふべからずとて、一致して駁論を公にした牧師たちもあつた。此中には今日の大宗教家が少からず入つて居た。何故再臨説が高く唱へられたかと言へば、其の直接に引く所の根據は、戦争が其の徴だといふにある。聖書の中に世の終末に先だつて大々的戦争があり、而して後基督が來るとあるから、其の豫言がこゝに成就せんとするのであるといふ。然し此の説を呼び出した眞實の原因は、戦争に依つて人間が苦痛と不幸を味ひつゝあることにあるに相違ない。親は子を、子は親を、妻は夫を、妹は兄を戰場に失つた。彼等の心には現世を果敢なむで他界を念ふの心が漲つて來た。失せし者を再び見たくて耐らなくなつた。世の終末は萬事が整理される時である。親は我子に友は友に、再び會うて絶えし縁をまたも繋ぐ時である。終末を望むの情に堪へぬのは無理もないであらう。之と共に戦争は大なる苦痛を齎らせた。生活は凡ての方面に於て壓迫された。昔の暴君の虐政の下に呻吟するやうな經驗を今日の世界で嘗めた。有意無意の間に世界の配濟の一新を翹望せざるを得ぬ。基督の王國の安息と幸福とを思はざるを得ぬ。此れ又再臨の切望となり、切望は信仰となつた所以である。更に又基督教會の行き詰つて居ることも世界的感情であるであらう。基督教は今日の人が其の信じ得ら

る、限り信じ、之を生活に適用し得る限り適用し盡した。もはや之より先へは進みやうもない。而して人類は尙之より以上を要求して居る、基督教は此の先までは手が伸ばされぬやうに思はれて居る。萬事人間の力、現在の力は身代限りである。そこで天よりの力が来て、世界を顛覆し新らしき國を立てなくてはならぬ。斯ういふ希望要求も人の心の奥深く力強く動いて居る。こんなことが原因となつて再臨説が一部に唱へられ出したものと見える。

其の氣合が我國にも感ぜられた。今は再臨思想の動いて居るときと見て取つた人々は、西洋とは人心の背景の全く異なる我國に於て、茲に基督再臨を唱ふべしとして起たのである。彼等は其の再臨來の理由として、西洋と同じことを言ふ。然し日本では戦争に依てそれほど不幸が著しく現はれて居らぬし、元來人心の下地がちがふから、西洋で唱へる所はあまり日本人に理解され同情されぬ、茲を以て彼等は世界の腐敗墮落と基督教會の俗化とを強烈に高調し、斯くあるが故に基督は再來せねばならぬと唱へて居る。

世界の腐敗墮落も事實であらう、教會の俗化も争はれぬであらう。是は革めねばならぬ救はねばならぬ。まさに眞個の基督信者の發奮蹶起すべき秋である。再臨論者果して此の動機に依て現はれたものであらば、其の動機には十分同情すべく、最も善き途に依て其の動機の結果を來たすやうに助けもせねばならぬ。まして西洋の如き事情の下に起つた再臨論者に對しては、吾人は深く之に意を留め愛の心を注ぎ之を最も善き方に導く精神を持たなくてはならぬ。

然し其だからと言つて再臨説が直ちに眞理であるとも言はれず、之を唱ふべしとも言はれるもので

はない。たとひ同情すべき事情動機に依てあつた信仰であるにしても、其の根據を考へ、其の價値を考へ、取るべくは之を取り、排すべくは之を排せねばならぬ。基督再臨説は如何に觀るべきものであらうか。

二 再臨説の限定

先づ決定して置く必要のあるのは、基督再臨の明白な意味である。再臨といふに色々の意味がある。然し大別すれば二つになる。一は靈的再臨である。二は有形的再臨である。靈的再臨とは、基督は此世を去つたけれど、其の靈は再び來つて弟子等の間に住み茲に活動し、或は弟子等を慰め奨まし、或は之を感化し之を清め、弟子等の靈を自己と一體たせるといふ意味である。有形的再臨とは、基督この世を去りて後或時期を経ば、再び肉體を以て天より雲に乗り來り、信徒に依て自分の國を立てるといふ意味である。

靈的再來のことは誰も之を争ふ者がない。基督の使徒等も之を経験し之を説いてあるし、基督自身の言の中にも之に關する約束といふが見出される。代々の基督信徒之を信じ、之を経験し、其に依て非常に尊き生命を取得し、此の信仰は基督教の最も深く大なるもの、随一となつて居る。基督再來主張者や凡て其の傾向の信徒は、此の靈的再來の方を殆ど忘れたるが如く放棄して説かずにある。此れはどうしても其の有形的再來の信仰と矛盾し、一を信すれば他は無用になり、他を有りとすれば一は有られぬことになるからである。そこで彼等は基督教の最も深く生きた所をもつて居らぬ、従つ

て基督教の生命を藏することが出来ずに居るが、さりとて靈的再來を否定することは出来ぬ。もし靈的再來を主張する者があるときは、あわてて我等も其の信仰を持つて居るといつて、其の信する箇條の中の共に當るものを引合に出すが常である。故に靈的再來的ことは争論の問題とするまでもないことである。實際争論は此の意味の再來がありや無しやに付ては無い。

唯だ問題となれるは基督の有形的再來である。之に付て最も淺薄に信する者どもは、聖書の約翰黙示録を其のまゝに解して、世界が段々悪くなり行き、虐殺や飢饉や疫病や戦争が遍く行はれ、地震があり天地晦暝などがあり、茲に基督が盛なる姿を以て天より現はれ、其から基督と基督の敵との雌雄戦となり、宇宙的大活劇の後、基督が敵を征服して全く之を滅ぼし、其の信徒を集めて國を立て、涙も死もなき新天新地が現はれると信じて居る。此の信仰の仲間は今度の大戦争は此の豫言されたる戦争にして、これが終つた後、基督が天より榮光を以て雲に乗りて現はれ今一つの絶對大戦争があり、それで世の終末が來ると唱へるのである。

其ほど窮屈でない再來論者は、一般の世界の状態から觀て、世界は段々悪くなつて行くばかり、人類は益々墮落して底止する所を知らぬ、見よ今回の大戦争も起つたではないか、此れまさに世の終末に近き時である、基督の再來すべき時であり、基督再來して世界の現組織を根本より一時に破壊し、茲に美しい其の王國を建つべき時である。斯う要求して斯う信じて居るのである。此れ等の再來論が問題の再來論である。

之と共に再來論に必然的に附帶する幾つかの問題がある。其は千年統治、肉體復活、世界的審判、

世界全滅、報賞及刑罰等である。基督が形を以て天より現はれ來るときには、凡ての死者は肉體を以て復活されて墓より呼び出だされ、其時生きて居る者と共に、基督の墓前にて悉く審判を受け、基督を信する者、之に事へし者は無上の祝福を與へられ、基督を信ぜざりし者、之に敵せし者は、外に投げ出だされて限なき刑罰に入れられ、基督は其の聖徒と共に神の國を造つて、新天新地こゝに成るといふものである。而して千年統治については前千年統治説と後千年統治説とがある。前説は基督が近き未來に來つて地上に有形の王國を立てる、其場所はエルサレムである。其時聖徒は甦つて其の榮光に侍するを得る。猶太人は此の間に基督を信するに至りて故國に歸り、全地の民も大部分は基督信徒となり、平和と祝福は洽く行きわたる。此が千年つゞき後、神は惡魔を一先解放する。そこで凡て基督に敵する勢力は結合して最後の大襲撃を聖都に向つて加へるが、基督は之を撃滅し去る。然る後惡人等が甦つて來て、こゝに審判があり、惡人は惡の報を善人は善の報を受けるといふのである。此は初代の教會に信ぜられ、十六世紀宗教改革の時アナバプテスト派に依つて唱へられ、今も再臨派は大抵この信仰である。後千年説とは、基督の再來と共に世の終末があり、死者はみな一緒に甦つて、其時生ける者と共に審判を受け賞罰を受け、基督は聖徒と共に千年間其國を支配し、然る後國を神にわたすといふのである。此方は稍穩で基督信徒の中には之を信する者が間々ある。然し之ならば特に再臨派など、自稱する特色は少いのである。兎に角再臨説は此の附帶の信仰をもどうしても切り離すことは出来ぬ。現に今日の再臨論者はみな此等の附帶信仰と共に固執して居る。

再臨説へ附和する者の中には、随分思想の混亂して漠然他人と共に大路を奔つて居るものが少く

ない。先日も或會合の歸途に一人の知人と談話した。其人は再臨説講演の席で一場の話をまでした人である。私が君は再臨を信ずるのかと問へば確に信ずると答へる。そこで再臨と言つても色々あるが、基督が肉體を以て天より降り來ることを信ずるかと言へば、其は信ぜぬと判然答へた。其人の方から更に肉體の復活を信ずると言ひ出したから、どういふ意味かと問へば、肉體の靈的復活を信ずると答へた。私は言つた。其では再臨論者ではない、有形的再來を主張してこそ再臨論者である。單に靈的再來ならば多くの基督信徒が信じて居る、其を自分等のみ熱心であるが如く言ふことは出來ぬ。又肉體の靈的復活などは意味を成さぬ觀念である。靈とは何か、肉體に反對したもの、意味ではないか。靈的肉體といふのは、寒冷的炎熱といふと同じであると言つた。こんな種類の人々は決して一人二人ではあるまい。事に依つたら十中の九か百中の九十九までは然うではないか。思想が混亂せずして有のまゝに問題を考へた時、再臨論者たる人幾人あるであらうか。

兎に角再臨説は肉體を以て基督が再來するといふ信仰である。此の再臨説を私は研究し、先づ此は聖書にある思想か否かを見、聖書にあらば如何なる意味のものかを見、其は如何なる價値のものかを明にしやうと思ふ。

三 聖書と再臨思想

聖書神學上から基督再臨の思想を觀るときは、此は言ふまでもなく肯定すべきものである。言ひかれば聖書に基督の再臨が説いてあるかと言へば、其は説いてあると答へねばならぬのである。此は

再臨論者の極力闡明せんと努めて居る所であらう。唯だ彼等は餘りに聖書を牽強し、もと再臨の意味でなかつた所をまで再臨の意味の句にして仕舞はうとして居ることは想像するに難からぬ。されど兎に角聖書の中には再臨思想があり、而も其が随分豊富だと言つて決して過言でない。

先づ基督の靈的再臨のことも勿論聖書中に豊富に出て居る。最も著しいのは約翰傳の再臨思想であつて、約翰傳では基督の約束した再臨は基督の世を去つた後、聖靈が降つて信徒の内に充ちたことに依つて成就されたことになつて居る。此の意味の言は多いが、神と我とは、我を愛し我が言を守るもの、内に來りて住むべしと言はれた所などが其の代表である。約翰傳では基督は靈として再び來つて信徒を慰め獎まし、また信徒の内に活動すると言はれたことになつて居る。思ふに約翰傳の著者は、其の著作の時に於ては、既に久しく基督の靈が自分と共に在り、自分の靈の中に其の聖なる心を注ぎ入れ、今尙盛に其の活動をなして居ることを経験したので、基督は再來して居ると信じたので、基督の一生中の教を顧み、其の再臨の約束を靈的に解し、斯く書き顯はしたものであらう。約翰傳著者よりも先に路加傳著者も、既に基督の再來を靈的に解して居たのは、名高き句、神の國は顯はれて來るものにあらず、此處に見よ彼處に見よと人の言ふべきものにもあらず、夫れ神の國は汝等の心中にあり（又は汝等の間に既に在り）といふ所、又路加傳一體の精神に依つて知られるのである。路加傳著者はパウロの弟子ルカだと傳説され推定されて居るが、其のルカの師たり、而して基督の大精神を最もよく發揮したるパウロの信仰に於ても、基督の再臨は靈的のものとなつて居る所が多い。彼には基督は既に來つて居る。彼はもはや我れ生けるにあらず、基督我に在つて生けるなりと言ひ、今我が生

けるは基督ぞ、死ぬるは我が得なりと言つて居る。其他パウロの書翰は、生きて自分と共にあり自分の内に活動して居る基督の経験を書いたものだと言つても決して過言でないほどのものである。パウロが信仰といふときには、其は單に基督を救主として首肯するとか、基督の教訓を奉ずるとかいふ意味のみでなく、實に基督を愛し之にあこがれ之と全く精神的に合一して一生命となることを意味して居る。彼は基督が自分の内に在つて、共に歩み共に活動し共に物言ひ共に手紙を書いて居ることを意識して居た。更に馬太傳馬可傳を見ても、尙靈的再來を明言せる所が多い。我名によりて二三人の集る所には我も其の間に在るべしと言つた所、又夫れ我は世の終まで常に汝等と共に在るなりと言つた所など其でないか。此の最後の一句は私から言へば批評の餘地がない句ではない。然し聖書の字句を一點も取り落すまいと苦心する再臨論者は、聖書古學上より言つて否定の證據のない此句を、馬太傳より削除することは出来ぬであらう。基督の靈的再來は、聖書の明言する所である。

然しながら有形的再來も同じく聖書に明言されてある。或人々は聖書の再來説は悉く靈的の意味のものだと言はうとするが、其も曲解である。有形的再來的思想あるは如何にしても否されぬ。パウロ書翰の中で最も早いものたる帖撒羅尼迦前書及び後書は此の再來を明言して居る。其の後のパウロの書翰中にも有形的再來的思想は豊富である。夜すでに更けて曉近づけりと言ひ、基督の來らんとさといひ、終の角笛の鳴らんとさといひ、主耶穌の日といひ、基督の現はれん時といひ、我等必ず皆基督の臺前に出でといひ、主は近しいといひ、其他此の種の多くの語は確に有形的再來を信する者にして言ひ得る所である。同觀福音書(馬太馬可路加)には再來的思想は世末の思想と共に基督の教として確に

傳へられて居る。曰く人の子は己れの榮光を以て諸の聖なる天使等を率ゐ雲に乗りて來るべし、其時凡ての人は審判を受け、大家畜群の中より綿羊と山羊との別たる、如く、大なる漁夫の籠の中より善き魚と惡しき魚との別たる、如く、收穫の中より麥と毒麥との別たる、如く、基督に従ふ者と然らざるものとは別たれ、一は永遠の幸福に入り、他は燼をさるる火に投げ入れられ、そにて哀哭切齒するべし、其の日の來るは倏忽としてまた一時的なり、二人の男同じ臥床に在らんに一人は取られ一人は残さるべく、二人の女共に白ひき居らんに一人は取られ一人は残さるべし、油斷して怠るものは婚宴の式を助くべく招かれて、油を携へざりし五人の愚なる童女の如く此の日を逸すべく、横着にして義務を果さざる者は酒に酔ひ部下の奴隸等を打ちたゞきて醜體の限を盡せる僕の如く、神より惡しき報を受くべしと。之と同じ思想は手をかへ品をかへて説かれてある。約翰默示録に至つては、全篇の目的が世の終末と再來と新天地とに中まつて居ることは前にも言つた通りである。

されば有形的再來思想は新約聖書の中に實に存すること言ふまでもなく、其の分量も決して貧しくはない。著者等が之に重きを置いたこともまた明白に見えて居る。此故に聖書にある以上は其のまゝ信ぜねばならぬ、聖書は一言一句疑ふべからざるもの、否此點と彼點と彼是輕重をつけてはならず、隨不隨を別ち取捨をしてはならぬものと言ふならば、基督の有形的再來は一言もなきことであつて、人はみな無批評的に之に従はねばならぬのである。

再臨論者は元來聖書についての觀念に於て既に一の定まれる形式を取つて動かぬものである。即ち聖書は神が靈を吹き入れて書かせたものゆゑ、一字一句みな活きて誤謬がない、故に文字のまゝ信ぜ

ねばならずといふのである。此の前提さへ真ならば、其の當然の論理、當然の結論として、基督の有形的再來は否應言はず信すべきものである。彼等の主張は前提より一直線に到達した結論であつて、確に論理的に徹底して居ると申すべきものである。かの基督再來の如きことには眼眩を感じて之を嗤ひつゝ、一方には聖書の字句に拘泥し、其の精神を捉ふるを怠る多くの平凡なる基督信徒の如きは、實に半上落下の信仰に在り、首鼠兩端に彷徨するものであつて、却つて最も笑ふべきものに屬する。

四 聖書丸呑すべからず

然し聖書が本來そんな性質のものであらうか。聖書は一言一句誤謬なしとは誰が言つたか。基督も言はぬ、神も言はぬ、使徒さへ言つてない。唯だ後の人が勝手にきめて仕舞つた獨斷ではないか。或は約翰傳の終の方に一二句その記す所は眞實なりといふ如き句があるから、之を楯に取つて聖書無謬を證明するか知らねど、元來聖書の各部はもと／＼互に獨立して散らかつて居た文書で、其を後の人が集めて一緒に轉寫し携帶し聖書と呼んだのであるから、其の文書の一つ／＼に無謬を自證してなくば權威にならぬ。所がそんなことはないのである。聖書無謬といふことが既に據り所のない獨斷である。

加之、聖書を無謬としたら其こそ大變な事になつて仕舞ふ。聖書のあらゆる字句がみな同等の價を有て、我等はどの點をも齊しく守らねばならぬとあつては、到底何事も出来なくなり、生きて行か

れなくなり、基督教が全く分らなくなつて仕舞ふ。聖書には其の著作の時代の人を限りて教へてある所がある。例へばパウロは哥林多書の中に、女が物を蒙らずして祈るは其の首を辱かしむるもので髪と異らぬから、寧ろ髪を剪るに若かずと教へてある。又今のやうな悩みの時代には結婚などはせぬ方がよろしいと教へてある。如何に聖書の教なればとて之を今日の世に守られもすまい。然し聖書の何處も同じ價であるならば之を守らねばなるまい。或は其邊は時代々々に依つて適用を異にすべき點などと言はゞ、此れ既に聖書を其のまゝ取らず、人間の考を以て之を取捨するものである。それならば他の點も同じ流儀で解釋し取捨して善い筈ではないか。

次に聖書の中には非常に多くの矛盾がある。大いなる所では舊約と新約はどうか。再臨派などは總じて舊約聖書をも新約同等に尊び、甚だしきは新約以上に尊び、其の一言一句も犯すべからざるものと信ずる。所が舊約の中には事實守れぬ所が多い。食物の規定でも随分六かしい。安息日と土曜日では必ず休まねばならぬ。其他日常の座作進退、大事小事一々細かい律法で規律され、千百の儀式を行はねばならぬことになつて居る。そこで再臨派でも第七日再臨派即ち末世の福音の仲間の如きは土曜日と安息日として厳守し、肉食を禁じ、其他色々のことを實行して居る。さうなるのが當然である。所が今日の人は却々そんなことは守れぬ。そんな要求を感ぜぬ。そこで目下の再臨派でも大抵はかかる主義から言つての破戒者である。異邦人である。が正當のことを言はゞ聖書の教へを守るべきであらうと思ふ。然るに彼等はいやそんなことは守るを要せぬ。基督は曾て我等のために世に降り、其の死に依つて凡て律法の下に在るものを解放した、我等はもはやそんな小學の下に在るを要せぬと言ふ

聖書は眞實なり
其の精神を捉ふるを怠る
其のまゝ取らず
人間の考を以て之を取捨するものである

(18)
イカヤロ
イカヤロ
イカヤロ

其の
頭正

らしい。其は他の人々が言ふならば道理だが再臨派が言つては全く主義上の自殺である。もし舊約聖書の或部分が既に不随不要となつたとすれば、聖書の一言一句犯すべからずといふ原則は破れたのである。聖書は吾人が自らの判断に依つて、此は基督の精神と合ふと信ずる所を取り、基督の精神に照らして誤謬である不用であると信ずる所を捨て、可いものとなつたのである。再臨論者はこゝを何と説明するか、其とも舊約の一字一句残らず生かし之を墨守して居るや如何に。

其よりも重大なのは舊約の精神と新約の精神とは其の間に餘程の隔りがある。基督も之を明言されて居る。曰く古の人には目にて目を償ひ齒にて齒を償へと告げられたが、我は汝等に告ぐる、そんな報復的のことはしてはならぬ、絶対に報復心を去れ、敵をも愛せよといはれた。實際基督の無限の愛の主義と舊約の交換主義とは非常に大なる價値の差別がある。或は神についての觀念に於ても、舊約のヤハウエはどうしても正義の神律法の神であつて、新約の神は愛の神であり天父である。こんなことを數へて來たらはてしがない。舊約聖書自身の中にも時代に依つて思想が發展し矛盾が出來て居る。例へばヤハウエの觀念にしても、或所は有形の仁慈の小さな神である、他の所ではイスマエル民族の守護神で他族の神々と對立して居る、更に他の所では全世界の神、天地の造主である。其他の教も舊約自身の中で矛盾して居ることを挙げれば此れ又限りがない。再臨派の中で聖書の内容も研究せず唯だ無茶に之を讀んで居る者は致方がないが、苟も聖書の研究などを口にする人々は、こんな事實に對して全然目を塞ぎ舊約は飽くまで内容が一致調和せりとは言はれぬであらう。さらば如何に解釋せんとするのであるか。況んや之を新約聖書の内容と比べたら觀念の高低は雲泥の相違である。主耶蘇基督

手
平

の宗教は到底猶太宗教の片相手ではない。

再臨派は舊約聖書に對してさへ無謬と全部活用とを唱ふるを已める能はざるものであるが、其の非難をば私の方から遠慮して、舊約のことは問はずとしても、新約聖書のみでも、一字一句無謬とし、凡ての點を活かし守らうとするのは、また同じく出來べからざる儀である。矢張これには調和すべからざる矛盾がある。基督傳の正直なる學者は、四福音に依て到底正確な耶蘇の詳傳を作り能はざるを感じて居るではないか。一例を言へば耶蘇が最後に上洛するとき、エリコ市の附近で盲者の目を啓いたといふ記事がある。馬太馬可共に耶蘇エリコを出るとき盲にあふとしてゐるのに、路加傳ではエリコに近づけるときとなつて居る。小さいことだが矛盾であらう。聖書の一字にも謬なしとすれば此の説明は何とするか。此に於て或は此は耶蘇が市の入口にて一人の盲者にあひ、其を出で、又他の一人にあつたのだと解いて此所を切り抜けんとする學者もある。甚だむきは此れエリコに新エリコと舊エリコとあつたので、一方のエリコをば出で他方のエリコに近づいた時のことだと解く者もある。最も苦しい解釋で寧ろ滑稽といふべく、又見苦しいといふべきでないか。其よりも何ぞ正直に男らしく此は必ず聖書の何らかに誤謬あるに依らざるべからずとせぬのであるか、其の位の錯誤がありたりとて、耶蘇一代の知識に何程の差別が起るか、聖書の價に何程の影響があるか。此れのみならず耶蘇が上洛して神殿より商人を逐ひ出したのは、約翰傳では傳道の初期にあつたとなつて居り、他の福音書では末期にあつたとなつて居る。此も二度あつたとする學者が多い。必ずしも二度あり得ぬとは言はれぬが、然し事柄の性質上一度あつたことであつて、聖書のどちらかゝ誤傳とする方が當つて居るら

幸徳秋水の解り

しいではないか。最も大なる疑點は耶蘇の十字架にかけられた日である。約翰傳では過越節の前夜に最後の晩餐を食したりとあるから、十字架にかけられしも猶太曆ニザンの月の十四日である。然るに他の福音書では何れも羔を殺すべし當日となつて居る。これならば十五日である。此の差異は昔より色々考へられ色々巧を加へて解釋されんとしたか到底抹すべからざるものがある。耶蘇の教訓の如きも一方と他方とは其の時期を異にし、事情との關係を異にし、前後の句との連絡を異にし、従つて教訓の意味を異にする所さへある。山上の垂訓でも馬太傳と路加傳とは全く異つた別の場合の別の意味の教となつて居る部分が多い。此等は大なる差異であるが、小さなものは到る所に充ちて居る。これでも聖書は一字一句そのまゝ傳へられたものと言ひ得るか、其のまゝ取らねばならぬと言ひ得るか、又取られ得るか。もしそんな事を言はゞ耶蘇基督は聖書の各書に依つて少しつゝ違つて描かれ、微細點まで一致して居らぬから、四人の基督があつた譯になる。否パウロ書翰の基督、希伯來書の基督、其他が加はる故十人二十人の基督あることになり、基督教は同觀福音書の基督教、約翰傳の基督教、パウロ書翰、希伯來書、約翰文書、雅各書、其他の基督教と、澤山の基督教が出来ることとなる。甚だ變なもの混雜したものになる。

元來聖書はそんなに一字一句を取るべきものでなく、其の底の精神を取るべきものである。此の聖書の根柢にある精神が至大無二ならば一字一句の末に多少の誤謬あつても少しも價を減ぜぬのである。凡ての字句を活かさうとすれば聖書全體が立たぬものとなり世の中に通らぬものとなる。聖書を一字一句讀んで行き、一卷々々讀んで行くと、其を讀み通した時全體の精神が我等に分る。聖書全體

は何を目的として居る、何を教へんとして居る、如何なる方角に人を導いて居る、如何なる能力を以て人を動かして居るか其が分つて來る。此が大切なのである。此の全體の精神、其の性質、其の傾向が即ちまた聖書其自身を觀る目安である。之を目安とするときには、聖書の各部どこも同じやうに貴くはない。或點は最も高く聖書精神の燒點をあらはして居り、他の點は其ほどでない。或は殆ど全精神に照らして價値のあるやなしやさへ疑はれるやうな所まである。そこで聖書の部分々々の價値が定まるのである。決してどの部分も價値が同じではない。それで貴い方の部分を貴び、其ほどでない方の部分をばまあ第二流のものとして可い。さうするとき始めて我等は聖書を奉ずることが出来る。矛盾したやうな所も全體の精神から見ると一致して居る。例へば路加傳の中には一方に我等に敵せざる者は我等につく者なりといふ寛容の精神の句があるかと思ふと、他方には我と共に歛めざる者は散らすなりといふ嚴しい句がある。聖書の學者は矢張之を問題にして居る。然し全體の精神から見れば基督教は或場合には寛大でなくてはならぬ、他の場合には嚴格でなくてはならぬ。然るに字句のみを見れば矛盾でどちらを守つて可いか分らなくなる。萬事こんなもので、聖書全體の精神を執へ、共に依つて聖書の部分を判断し、之を解し、之を輕重し、或は之を取捨さへせねばならぬのである。ルイテルの如きはあれほど敬虔の人でありあれほど聖書に頼つた人であるが、決して聖書の死文に拘泥しなかつた。彼は聖書全體の精神は基督の贖を説くことだと見て取り、之に觸るゝこと多きものが最も重く、少きものが最も輕いとした。雅各書の如きは彼は之を輕んじ、黙示録についても重を置かなかつた。

聖書を通讀するときは其の全體の精神として我等に執へられるものが其が實は基督教である。此基督教は二千年の間教會の精神となつて發展した精神と同じである。教會の精神の中には不純なものもあつて、其が發揮されて誤つたこともあるが、然し確に二千年來人を救ふの活動をした方面がある。此が基督教で聖書の精神と同じものである。また聖書の精神は我等が祈に依つて直接に神に接し、直接に基督に接して經驗する所の基督教と同じものである。かくて基督教は基督を源とし中心とし神經系の如く全信徒の内に生きて通つて居る生命である。此の基督教が吾人の全靈を支配し、吾人の生活の端々に湧き出で、又聖書の全體に溢れ、其の一字一句の底の意味となつて居るものである。

故に聖書は確に權威である。けれども其は聖書の文字でなくして聖書の精神である。聖書の精神は吾人の思想行爲の價値を定める標準になると共に、聖書の文字の意味を定め、其の價値を定める標準となる。聖書の文字其物は死文である、其の背後にある基督教が生きて居る大切である。聖書のなかつた時にも基督教はあつた、聖書は其の成りし時代の基督教社中に磅礴した精神を表はすものとして生じたのである。基督教は聖書の中に在る。然し聖書より超越して居る。聖書の或部分が不隨となつても基督教には影響はない。極端に言へば聖書は無くなつても其の精神たる基督教存する間は新なる聖書が出来るのである。聖書の中の一部、而も其が全體の精神に照らして極めて些末なる一部のために、聖書全體を犠牲にし、基督教を聖書の軽き内容と心中させんとするは、愚にして不信仰の話である。再臨派の如きは聖書を偶像視して居る。聖書の文字のみを尊びて居る。パウロ曰く饑餓は殺し靈は生かすと。

且又聖書は聖書を信ぜしめんために書かれたものではない。神を信ぜしめんため、基督を信ぜしめんため、人を救はんがために書かれたものである。故に聖書を信仰の目的にして耐つたものでない。聖書は用ふべきものである。其れ故聖書の目的を見、其の目的とする所を果たし、神を信じ基督を信じ救はれるやうにならねばならぬ。其れが出来れば聖書はある甲斐があるのである。聖書ばかり尊ばれ一言一句勿體なく思はれても、肝腎な大目的が達せられぬやうでは、何萬卷の聖書も何の役にも立たぬのである。

プロラスタントは十七世紀以後聖書を偶像視し、これがために天主教が法王を信じたと同じ結果に陥つた。一方には神も基督も背後に押し入れられた。神と交はる基督と一體となるといふやうな努力も意識も衰へ果て、居る。彼等は基督教とは聖書に記してある所を知り、其を承認肯定することだと思つて居る。此れ形式的な淺薄なる宗教である。かゝる人と宗教の事共に談すべからず。宗教は更に生命らしいものである、神秘的のものである。一體聖書を研究し知識し、こんなことが言つてある。あんなことが言つてあると其を振り舞はした所で、其で宗教が有るとは言へぬ。事實そんな人で一向宗教のない人を見受ける。聖書の研究は聖書を研究するためではない。宗教を得んためである。即ち耶穌基督の靈に接し、之と一體となりて神の子供となり、神の子供たる信と愛の生活をするために聖書を研究するのである。再臨派の人などがこんな點に余輩と相解するや否や私は其を期せぬ。且つ又聖書に記してあるから何でも信ずるといふのでは、本當は信仰ではない。信仰は自分が自分の心を働かせて、我は斯く信ぜざるを得ず、故に斯く信ずとして信じたのでなくては價がない。聖

書に言つてあるから何でも信ずるといふのでは、自分が信じて居るのではなく、聖書著者が信じて居るのみである。世にはこんな信者が少くない。こんな信者が一番危い。自分で信じて居るのでないから全く頼まれぬ。そんな信仰は偶像信者の信仰と同じだ。經本に書いてあるから信ずるとか、他人から宣言されたから信ずるとかいふのは偶像主義である。異教は經本を非常に重んずる。特にマホメット教は經本の宗教と言はれる位に之を重んじ、是は天啓であつて其の言は絶対に誤なく人は之を全く守らねばならぬと言ふ。然し基督教は其と異なる。基督もそんなことを言はず使徒も言はず、却つて神は靈なれば拜する者も靈と眞を以て拜すべしといふ主義で貫いて居る。

兎に角聖書は其の精神の至大無二のものであつて、人を神に結びつける力の至つて強いものであるから、之を信じ之に依らなければならぬ。唯だ字句に拘泥し、一部を取つて全體を忘れるやうなことがあつてはならぬ。故に聖書の或所にあればとて、其の信仰を人に強制すべきでない。全體に照らして信ずべくは信じ重んずるを要せずば重んずらずして可いのである。

五 再臨思想は時代思想

斯く觀來つて再臨思想は如何と顧るに、此は聖書の中にはあるが、此は時代思想の産出した基督教信仰である。當時の世界に二つの大なる思潮があつた。其は救主來の思想と世未來の思想であつた。救主現はるべしといふは當時の世界的思想にして、東は波斯邊より西は羅馬にかけて行はれたものである。而して救主は一たび此世を去つて再び來ると考へられた。猶太では特にメシヤ來るべし、神國

現はるべしといふ信仰があつた。然し猶太人の心あるものは當時の天下を眺め、メシヤ(救主)の來りて神國を建てることは、現世界の組織に於ては到底望むべからざることに屬するを見た。國運の益々非にして基督誕生に近き前と後とに起つた外國の迫害は、猶太人をして現世神國に望を絶たしめたが、然し神國は必ず現出すべきものだからと言つて、彼等は神力に依る天地一變を夢み、メシヤは天より雲に乗りて來り、現世界を顛覆して新らしき王國を立て、猶太人は其の國の中に在つて榮え、他國人壓迫せらるべしと信ずるやうになつた。此れ紀元前百六十年時代のスリヤ王安テオクス・エビファネスの猶太教迫害の頃より最も盛となり、基督の後一世紀以上も旺盛なりし信仰である。其の文學は黙示録又は開示録と稱せられ、未來記の様子を以て書かれたもので今尙數種残つて居る。舊約の但以耳書は其の一つで、其外經外のものとしてエノク書、エズラ第四書、ヨベル書、モーセ昇天記、シブラ神託、パルク開示録等がある、此の思想が新約の中では約翰黙示録となつて居るのである。

基督は斯かる時代に出でた。彼は神國來を説き、人を精神的に救ひ、而して殺された。其の弟子の社中は彼の人格に於て救主の顯現を認めた。されば時代に最も濃密に浮動して居た二つの思潮は、基督の人格に於て合流し、かくて基督の弟子の社中では、基督の新人格は忽ちこの思潮を併呑して其を具體したものとつた。基督は救主である、然るに殺された、メシヤたるもの其のまゝに已まん筈はない、世人が救主に期するが如く彼は再來せねばならぬと、斯う確信した。基督が殺された後復活したといふ信仰も、其の初めて弟子等の間に起つたのは必ずしも此の猶太思想に依つたとは斷定出來ぬ。何となれば弟子等にはまだ其ほどのことを思ひ回らす餘地が無かつたであらう。然し弟子等は救

主については亡ぶべからざるものと信じ、又其の再来といふことも幾分思つて居たであらうから、果して耶穌を生存中に救主と信じて居たならば、其の不朽と再来との思想は無意識の内に作用し出して、耶穌復活の信仰を醒ましたといはれる。が復活の信仰の起源は兎に角、此の信仰のいよ／＼社中に堅くなり深くなつた理由の一は、以上に言つた時代思想に養はれた所にあるに相違ないのである。けれどもメシヤの再来としては復活は尙其の豫期を充たし要求を充たすに小さい心地がしたのは當然である。メシヤは天より大軍を率ゐて来て現世界を亡ぼし神の國を建てる者だといふのであるから、復活の以外に更に大なる再来がなくてはならぬ。其の再来の時がヤーウエの日である。主の日である終の大なる日である。弟子等はかく觀た。プライデレルやハルナツクのやうな自由の見解の學者は勿論、今日の學者の見る所は大抵一致して居る。此さへ否定するは餘程な頑固者であつて、世界に其の所説を眞理と信ぜられて居らぬ連中である。基督教の再来世末の信仰の由来が此であるのに、然るに弟子等の時代は非常なる壓迫の時代であつた。初は猶太人の迫害があり、やがて羅馬人民の迫害があり、次で羅馬政府の迫害があつた。使徒行傳の中にも既に前の方の迫害は出て居る。其の後の紀元六十七年頃の羅馬皇帝ネロの迫害、九十六年頃の同ドミチアヌスの迫害などは其の中で最も著はれたもので、二世紀に入つても斷續して起り、其間基督教徒は捕へられ、殺され、辱められ、追放され、職業を奪はれるなどあり、残れるものも此世に於て殆ど安さ心はなく、生命を保つ望さへ無き状態であつた。斯かる事情の下にあつて長く耐へ忍ぶは非常に苦しく、そこで一日も早く基督の再来せんことを要求した。此の要求を以て基督の生存時を回顧すれば、其の言の中に、再来の日は遠からず、最

初の弟子の尙ほ世に在る中にあるべしといふやうに聞えたものさへあつたやうに記憶する。そこで基督再来は間もないといふ信仰が行はれ、弟子等は其日を見るべしと期しつゝ死んだのである。

されば再来思想は時代思想と基督教との結合に依つて生じた産物である。基督の弟子等は時代の兒であつたから、如何にしても時代の思潮の基調から離れることは出来ず、此の基調の上に立つて基督を信じたので、茲に再来思想をも抱いたのである。弟子等の書いた聖書に再来思想あるは怪しむに足らぬのである。若し全くそんな色彩に染むで居ないならば、其こそ聖書は變な書物であつて、當時の人心と全く没交渉なるものであり、従つて人を救ふの力を有たなかつたに相違なく、また今日の我々は聖書をいつの時代の著作とも何人の著作とも全く定めかねて、聖書に對する信用を抱くことが出来なくなるのである。

此まで考へて聖書の再来思想を批評すれば、もはや其の價値は大分明白になつて来る。再来思想は時代思潮の片影であるから、何程聖書の中に在つても、之を時代の思想として看別けるべく、之を永遠の眞理として取り扱ふを要せぬものである。聖書の著者とても人の子である。されば其の思想も一から十まで神の思想とはされ難い。時代の思想に感染して書いたものなれば、時代思想の不完全な所が矢張這入りこんで居るは争はず已むを得ぬ。故に時代の再来思想を赤裸々に露はして詮窄し、其が理ならば聖書の再来思想も理あり、然らざれば價がないのである。而して再来思想が價がないからとて、聖書に疵がつくでもなければ、基督教の力が衰へる譯でもないことは前に言つた通りである。

或は再來思想は猶太思想に相違ないが、猶太人は偉大なる民族である、猶太教を出だし、基督教を出だし、今尙大學者や大富豪や其他の人物を輩出して居るから其の民族の思想は尊重し信用せざるべからずと言ふ人もあるさうだが、そんな論法は手品師が右の手で盛に華やかな藝當を行ひ、觀客の視線と注意とをそこに集中させ、左の手で次に現はるべき種を造つて置き、右の手の動作をやめて不思議の結果が現はれ來つたのを思はしむると一般、甚だ理に合はぬ言草である。ルーテルが偉大だからとて獨逸人の軍國主義が不可争の眞理とは言はれまい。クロムウエルやミルトンやウエスレーが偉大なればとて英國産の功利主義が絶對の眞理とは言はれまい。其と同じ理である。猶太人の思想だから取るべしとは言はれぬ。もしそんなことを言ふならば、耶穌基督を拒みて十字架につけた思想も、猶太人の思想だから遵奉せねばなるまい。再來思想が猶太思想の基督教に混入したものだとするれば、其は基督教より排泄して基督教を淨めねばならぬのである。

此故に聖書に於ける有形的再來思想は、時代思潮の影であつて、著者等は之を信じて書いて書いたに相違ないが、基督教純正の面目とするを要せぬものである。もし聖書中にあることゆゑ一も二もなく信ずべしといふことが不道理の要求ならば、此の有形的再來の思想は吾人に信仰を強うる資格のないものである。
著者 知性 大馬 あり

六 耶穌基督の思想か

再來思想が時代の思想だとすれば、弟子等は無論之を抱いて基督の再來を唱へたであらう。が然し

耶穌基督が自身何程再來を説いたか疑問となる。ハーゼの如き學者は、基督は決して自ら再來して世界を審判するなどいふそんな狂信的な言葉は一言も發せなかつたに相違ない。と言つて居る。ハーゼは勿論基督に未來を洞察する明眼はあつたといふのである。實際基督の教訓その宗教の全體と照らして見ると、有形的再來や審判の如きは、如何にも調子の合はぬもので別の宗教の分子の習合としか思はれぬ心地もする。基督の宗教は凡てが靈的である。物質的の形を以て物質的の天より雲に乗り來り、現世に國を立つるなどいふ思想は、其こそ奇想天外より來つたものゝ感がある。基督の國も靈的の國である。基督はどこにも此世の國を立つるやうなことを一言もいつてない、我國は此世の國にあらずといつたとさへ約翰傳には傳へられて居る。又神國の立て方も、一時に天の軍勢を率ゐ來つて、世界が瞬く間に變るといふことも、基督の思想の常を失つて居る。基督は自己の靈の力を以て人を入々々導き、之に新しき生命を注ぎ入れ、之を神の子供とし、かくするに依つて神の子供の出來るのを天國とした。そこで天國は初には芽出で次に穂出で穂の中に穀を結ぶなりといつた。次第の開發で進んで最後に花の開く如く完全になると考へた。其と再來思想世末思想とは全く合はぬ。之を基督の教ならずとするのも決して道理のないことではない。事によつたら耶穌は全く之を語らなかつたのを、福音書著者が誤つて耶穌之を語つたやうに傳へ知り、さう書いたものであるかも知れぬ。或は耶穌がそんな意味で語つたのではないことを、弟子等が時代思想の色に染められた心で考へ、再來世末のことと思ひなしたのでもあるかも知れぬ。

然し其は理論上よりの推究であつて證據のないことであるから、矢張基督は再來を告げたと記され

てある以上は、其を取つて基督之を語つたこと、せねばならぬ。が其はよし再來の教をなした所で、果して其が何程力をこめて説かれたか、又は何程の分量があつたかは疑問である。基督の教も速記録の如きものではない、されば聖書の著者が之を傳ふるに當りては、如何にしても主觀の色彩を免るゝ能はざりしを以て、時代思想で溢れて居た弟子等は、基督が再來のつもりで語つたのではない所をも、再來世末のやうに解して記した點もあるであらうし、後年の思ひ出であつて見れば、著者自身の思想を耶蘇の語つた所のやうに思ひこんだ點もあつたであらう。カイクやブライデルなどは、耶蘇は再來のことを言ひはしたが、聖書記者たちは、當時世に存在して居た猶太人の世末記の中から、多くの材料を取て、之を耶蘇の言に加へ、之を賑かなものにしたと言つてある。サルモンドのやうな人は、耶蘇の再來世末に關する言葉は、餘りに質素卒直にして、猶太人世末記のやうな誇大の形容がないから、猶太人世末思想から取たものではないと言つて居るけれど、確に感化を受けたと見る方が至當であらう。感化を受けずに在るといふことは考へられぬことである。こんなことは後述の如き。

基督の言の中で、世末再來のこと、エルサレム滅亡の豫言とは、思想も言辭も頗る混合し、之を區別すること出来ぬやうになつて居るが、之も基督の言がどれほど世末再來を言つてあるか疑はれる理由の一つになる。基督はエルサレム滅亡を豫言したのを、其を世末再來と解して居る。さればもと再來の意味でない所を再來と解した所があるのである。こんなことが割合に多いかも知れぬ。或は基督は靈的再來のつもりで語つた所を、取り違へて有形的再來とした所が多いのではないか。然しながら基督の有形的再來は聖書の中では基督の語つたことになつて居る。其の反證といふものがある。が果して吾人は其に従はねばならぬものであるか。

七 基督の言ならば如何

卒直に言へば基督の言たりと一言一句の端まで其のまゝに信ぜざるべからずと謂ふべきものではない。元來言語といふものは人間の造つたもので不完全なものである。屢々誤つて思想を表はすことがある。基督の自ら包藏して居た神の精神を、其のまゝ少しの歪みも曲りもなく顯はすには、人間の言語はあまりに不完全であつたに相違ない。基督は或る眞理を思つて其を顯はしても、人間の言葉では徹底せず、又容易く他の意味に取られることが多かつたに相違ない。一言一句の末を捉へて、基督がこんなことを言たと言はれるのは、基督の頗る迷惑に感ずる所に相違ない。吾人普通人でも此の種の迷惑は屢々感ずる。或る場合に言つたことを記憶して居て飛でもない場合に持ち出されて、頗る面喰ふことがある。基督が我と共に歛めざる者は散らすなりと言つたからとて、小異あるものを排斥撲滅する態度に出たら、其は確に基督の意を誤つたものであらう。基督は他の場合には我等に敵せざる者は我等につく者なりと言はれた。兩方を見、全體を見ねばならぬ。一言一行に拘泥してはならぬ。

再來は基督の言ゆる諸君基督にだまされやうではないかなどいふのは演説術から言はゞ巧なものだが、眞理に忠なるものとは言へぬ。

否々言語が基督の心を誤るばかりでなく、基督自身とて知らぬこともあり思ひ違ひもあるに相違ない。基督は意外に感じたといふことが聖書の所々に出て居る。世の終もいつ来るかは天の使も知らず御自分も知らぬと言つたとある。知識の不完全を自ら告白されたものである。思ひ違ひもあつたことは、申命記をモーセの書いたものと信じ、マカバイヨス時代の詩をダビテの作と信じたことと記されてある所でも察せられる。頑固な信者や學者は耶蘇の言つたことゆゑ申命記はモーセの書いたものでなくてはならぬ、彼の詩はダビデの歌つたものでなくてはならぬと唱へる者もあるが、其は餘りの剛情無茶といふもので、そんな精神では世の中のこととは勿論宗教のことも一切分らぬ。耶蘇の世末再來其自身すら、耶蘇は弟子等の生存中に遂げられると言つたとあるに、此も外れて居るでないか。

之を以て由々しき大事とし、こんなことを言ふは不敬であり異端であると思ふ人もあるかも知れぬ。必ず再臨派などは左様罵るであらう。が今の世界ではそんなことは聖書學者の尋常一般のことである。また基督教神學者の一般の意見である。日本では眞實聖書も神學もどれほど研究されて居らぬ。然し聖書を本當に讀んで居るもの、之を研究して居るものは、再臨派などのやうなことを言つて居られぬのである。再臨派や其他聖書を知らぬ人々は、聖書を開いてそも／＼の創世記の天地創造の記事からして、文字通りに信ぜねばならぬと思ひ、神は六日に天地を造つた、其の順序も創世記に出て居る通りだと考ふべきものと思つて居るらしい。けれどもそんなことは今日吾人が神の造つた天地

を實際に研究して見れば、どうしても文字通りに信ぜられるべきものでなく、又信する必要のないことを感ずる所であつて、聖書の讀者研究者は、そんなことに拘泥せず、創世記の底にある精神に接し其の信仰に觸れんと志して居る。舊約一體大抵そんなものである。新約になり耶蘇の言になつても此の筆法は矢張用ゐられる。唯だ新約の特に耶蘇の言となれば、今日の知識思想に依つて加減せらるゝ點が非常に稀にして、悉く生命の言行であり悉く宗教の實質であるといふ事を認めるのみである。けれども耶蘇の知識を完全無缺と言はれぬことに於ては、信仰の篤くして決して再臨派輩に一步も譲らぬ神學者聖書學者侃然として之を認めて居る。例へば日本でも多くの讀者を有するプラムマーの如きも、舊約の批評的知識に於ける耶蘇の缺乏を釋して、此は耶蘇が地質學や天文學の知識のなかつたのと同じ類のことであると言つて居る。前にも引いたサルモンドはまた有名の篤信なる聖書學者であるが、耶蘇が終の日は我も知らぬと言はれた所を註して、此は決して耶蘇の内に神性と人性とがあつて、神性の方では知つて居るけれど、其は在世の時隠れて居るので、人性の方で知らぬ無知の謂だなどといはれぬ、又或目的のため故意に無知になつて居るでもない、又知つて知らぬふりをして居るのでもない、眞實に知らなかつたのであると言つて居る。がこんな學者の説を引たら其こそはしてがない。寧ろ今日では耶蘇は神だから何もかも知つて居たなどいふ學者が稀だから其の方を引た方が早いのである。否私は讀だ書物の中では今日そんな説を持つて居る人を見出ださぬ。信仰篤くして聖書を忠實に研究し之を知つて居る人はみな以上のやうな説である。しうやうな説は

それで自分の信仰を失つたり又は他人の信仰を害したりするかと云ふに決してそんなことはない。

耶蘇のかゝる無知は一毫も耶蘇の基督たる威嚴をも力をも減殺せぬのである。耶蘇の尊い所、其の吾人を救ふ所は、彼が精神に於て神と一體であり、吾人に神を現はし、吾人に己れの至聖至愛の靈を法ぎ入れ、吾人を實に神の子たらせて限りなき生命と其の祝福とに入らしめる所にある。彼は神の知識について圓滿である。神人の關係の知識に付て完全である。此れが吾人に取て至大の價値である。吾人は此以外を耶蘇に求めぬ。吾人は天文學や地質學を耶蘇から學ばうとせぬ。舊約總論の講義を耶蘇から聽かうとせぬ。故にそんな事の知識は如何にあつても耶蘇の價は同じい。されば耶蘇の言に不完全なる所があればとて、誤つた所があればとて、其が極めて末のことに屬し、吾人の救に無關係のことであるならば、少しも頓着するを要せず、耶蘇は依然として救主であり神の子である。故に耶蘇がよし有形的再來を語りたりとて必ず信ぜねばならぬものでなく、其が誤謬であつたからとて周章狼狽することはいらぬ。耶蘇に對する絶對の信仰を抱き、其の救に依つて救はれることが十分出来る。

元來世末も再來も耶蘇の經驗したことはない、まして弟子等の經驗したことはない。耶蘇は神の愛の如きことをば十分經驗した、弟子等は基督の救をば十分經驗した。此は經驗ゆゑ心的事實に屬し何人も否定すること能はぬ。此の經驗を披瀝して吾人に示した所は、其故千萬鈞の重きを以て吾人の靈を壓して來て之を信ぜず居られぬ。然し世末の如きことは未だ何人も經驗せぬ。たゞ推測である。思辨である。推測や思辨は間違ひ易い。想像や論理はどちらの方向にも延き行かれるものである。されば世末や再來の如き推測思辨に出た教は、よし其が耶蘇から出たにせよ、弟子から出たにせよ、之を心の實に經驗した所から吐き出した教と同一の價に見ることは出来ぬ。推測思辨はさちんと定ま

つた型のあるものではないから、吾人自身も吾人自身で推測し思辨する自由がある。吾人の自ら試みる推測思辨が、どうしても前人のと合はぬならば前人のを信ぜずとも、前人また吾人を咎める理由はないのである。基督の如き美くしい人格が今の人のどう考へても信せられぬ推測思辨を、無理に信ぜよ、信ぜずは地獄に落とすぞと言はれる筈はないのである。世末再來の思想は根據が薄弱なるが故に、其は誰の教にしても吾人が絶對に服従せねばならぬ性質のものではない。其は致方がない。其を基督教と其とも有形的再來の信仰が基督の宗教の主眼點を成し居るならば、其は致方がない。其を基督教として立て、吾人は其に據て去就を定め、基督教は其に依つて興敗せねばならぬ。再來を信ずる人が無くなつたら基督教は亡びることになつてもかまはぬ。吾人は世に一人の基督教を信ずる者がなくなつても再來を主張せねばならぬ。勇らしく之を枕にして討死すべきである。然るに再來思想は果して基督教の中心か。再臨主張者の中には、基督教は基督再來に集中す、聖書の全精神は此を指さす、四十年の聖書研究は茲に歸着したなど呼ばはる人もあるさうである。獨逸にも耶蘇の宗教は世末教だと唱へし學者がある。ヨハネス・ワイスマヤアルベルト・シュワイツェルなどである。けれども其は甚だしく歴史を偏り見たものであるので、之に同意する學者は稀である。加之、其等の學者は聖書をあのまゝに信せぬどころでなく、耶蘇の一代などは到底知ることを得ざるものと斷念して居るやうな人々なれば、今吾人の目前の再來信者世末信者とは、全く氷炭相容れざる立場にあるものである。然し耶蘇の宗教が果して世末再來に重きを置きしかと言ふに、耶蘇の教訓、其の生活、其の性格の全體に照らし考ふるとき、全く反對の方向に結論せらるゝを禁ずることが出来ぬ。

先づ再來信者は耶蘇が再來して神の國を立てるといふ。確に耶蘇は神の國を立てんと目的したに構違なく、未來に於ては神の國が完全に成ると確信したに相違ないのであるが、其の神の國とは如何なる性質のものであつたか。再來信者は之を此世の王國と同じ性質な目に見えた國、空間を占領し、又千年といふ時間を有する國だといふ。即ち物質的に見て居る。けれども耶蘇の言を見ると、我國は此世の國にあらずとあり、天國は顯はれて來るものにあらず、此處に見よ彼處に見よと人の言ふべきものにあらず、夫れ天國は汝等の内にありと言つてある。萬事を靈的に見、靈的に化せんとした耶蘇が、物質の王國を立てんとしたとは頗る解すべからざることである。神は靈なりとあるに神の國は物質的であるか。神は靈として天地に遍在するのに、基督は天の何所かの限られた場所から、雲に乗つて來るのであるか。神の國が地上に現はれるとしたのは實に猶太のレビ教以後の宗教を其のまゝ繼承した思想で基督教ではないのである。

次に其の神の國の現はれ方も再來信者のいふ風に突如として一時に現はれるものであらうか。耶蘇の言にも、神の國は人種を地に蒔くが如し日夜起臥する間に種は生れ出で、育ても其の然る故を知らず、それ地は自から實を結ぶものにして、初には苗次に穂出で穂の中に熟したる穀を結ぶといふ所がある。神の國は發展である。又前にも引た句、天國は顯はれて來るものにあらず、汝等の内にありといふのも、また天國の性質をあらはし、神の國一名天國が既に目に見えぬ所即ち精神界に始まり發展して行きつゝあることを示し、前の句と合はせて、此が次第に靈界を蔽ふに至ることを思はしめる。神の國は再來信者の言ふやうな性質のものではない、靈的である、其の現はれるのも突如ではない、然

人の心の内人類の精神界に漸々發展するものである。其が後に全く人類をまほひ聖なるものとなるのである。

第三に神の國の終局の主宰たる神についての耶蘇の觀念も再來説とは一致せぬ。耶蘇の觀念に依れば神は天父である。天父といふは靈にして人を愛するのみならず、現在吾人と偕に在り吾人を愛し護り、吾人の内部に活動して吾人を誘導感化しつゝある者といふ信仰を内含せるものである。天父の信仰が尊くして吾人に無限の價値を有するのは、實に此の内容を有して居るからである。此は再來説と到底兩立出来ぬ思想である。再來信者は世界は墮落してばかり居る、到底回復の見込はないといふ。彼等の觀念では神は千萬里の遠い天といふ場所に居り、世界をば其の成るがまゝに放任してあることになつて居る。其は猶太教の末期のレビ教の觀念である。又其は超越神論である、宿命論である。厭世主義である。基督の抱かれ説かれた天父教とは全く反對の宗教である。されば天父信仰を持ち之に依つて生き給うた基督が再來説などを其の中心とするとか重んずるとかいふ筈はないのである。

第四に耶蘇の人類觀理想觀もまた明に其の宗教が世末教でないことを證して居る。世末をまもに思想するものはどうしても現在を輕んずる。特に人生の幸福に同情せず、世界の活動に興味を失ふ。只管世末の準備に心を集中し隱遁的となる。今日でも其派の者は世末近し、世の中の事業の如き無用の事をするは愚である。一に祈に日を送り誰も彼も傳道者になれといふやうなことを多く言つて居る。日外も或婦人が來て末世の福音の人から教を聽て居るが、自分は事情あつて多年學び得た技術により家計を助けやうと思ふのに、其人は世の終が近いのにそんなことをしては可けない、傳道者になれと強

一 勧めてくれる、然し私にはそんな馴れぬ仕事は出来さうもないが、神の命だと言はれるので感うて居ると問ふた。いづれこんなことを考へるに相違ないのである。學問の如きをば總じて輕蔑し、一書主義などいふことを慥面もなく唱へ、聖書ばかり讀んで居ればよい、他の學問などすると信仰の害になるといふ。日外も或學生が來て、真傳會の傳道師が私に向つて、シエークスピア何ぞブラウニング何ぞ、ニウトン何ぞ、ダルウイン何ぞ、其を知つたと何の役に立つかと言つたと話した。彼等は斯くて文明といふことを非認するのである。世界の進歩の中に神の活動があることを思はぬ。矢張神は世界を手放して人類はたゞ罪のみに依つて前に進んで居ると思つて居る。生活の萬端についても彼等は非人道的である。原始教會の世末思想が娶ることを禁じ食を斷つことを命ずる徒を産出した事は提摩太書の中に出て居る。パウロの如き人も世末再來の近きを信じたため稍隱遁主義の臭味を有する所がある。彼は時代の惱みの中には娶らず嫁かずして居るを得ば其に越したことはないと言ひ、主の來るは近し今暫くの我慢のみと言つて患難に堪へた心も見えて居る。唯だパウロは人格の全體に於て更に多く基督の精神を體して居た。故に彼の宗教は世末思想のために多くの累を受けなかつた。結婚の問題も最後の書翰たる提摩太書になると之を是認し祝福して居る。兎に角世末思想は如何にしても世界人生を冷かにするを禁ずる能はざらしめる。然るに耶蘇は如何、彼は再來派の人々のやうに人間に愛想を盡かさなかつた。世界に絶望しなかつた。人生の事業を輕蔑しなかつた。人生の幸福を厭棄しなかつた。彼は人間を神の子供、教ふるに足ると見た。世界の前途は必ず善くなると見た。人は日常の生活に従つて各々勵むべく世を棄つるを要せずと見た。衣食も婚嫁もまた感謝すべ

子肉へ 140
又神の命
は神の命
は神の命

く祝福すべしと見た。彼は人々愛せよ、縁なきもの敵の者まで愛せよと言つた。戰つて世界を善くせよと言つた。世末派が人に絶望し世界に倦み、隱忍して只管再來を待つたり、我國の其派のやうに、世を罵り人を辱め教會を壓して、積極的には殆ど何等人心を開導し基督の美を注ぎ入れる所ないのと比して、其の調子が根本から異つて居る。こゝに同感の如き如きや文明を不
第五に耶蘇の救ひの觀念は世末派の其と全く種類がちがふ。世末派は基督の再來があるとき、何れも基督を信じ再來を待つて居るものは救はれるといふ。然し其の信ずるとは何を意味するか、救とは何を意味するか。信ずるといふは唯だ耶蘇を主よと呼んで居ることである。言はせたら其より以外に何かあるやうに言ふであらうが、然し其の主張や行動の平素に照らして見れば、我は基督を信ずると言ひ顯はしへすれば其で信者であるとして居ることが分る。又救といふことも殆ど分つて居らぬ。天國に入れられるといふまである。佛教が安樂國に往生するといひ、マホメット教が樂園に入るといふと異なる所はない。勿論千年國が物質的なものだから其の筈である。然し基督が主眼とせられたはそんな救のためではない。基督の死だのは人をそんなことにせんためではない。彼は人を神の子供とせんために一生努力し終に十字架にかゝつた。即ち御自分の内に充つる聖なる徳愛なる徳を人の心に注ぎ入れ、人を自らと同じ心を持つたものとし、自らと同じ思ひを思はせ、同じ行を行はせ、かくて父なる神と一致させ、神の子たらせて、其によつて至極の幸福をもたせ永遠に亡びざるものたせしたのである。此が基督の救であつた。是がために死にもした。救がこれであつたとすれば、再來の如きは無用であるし、世末思想の如きは異教思想である。基督が天から大軍を率ひて來襲し、敵を亡

ぼして國を立てるなど途方途微もない思想となる。そんなことをして基督の名を呼ぶものを千年國に入れた所で、内面が改まつて神の子になつて居らねば、其は救はれて居るものでなく、幸福はあらねぬし、改まつて救はれて居れば初から幸福で千年國などに入らずとも、精神に於て神の統治、基督の支配を受け、幸福限りないものである。さればよし耶蘇の言に世末再來があつたにしても、其は耶蘇の宗教の本旨に照らして極めて軽いもの、中心を距ること遠い片隅端末のものである。もうはかりもあつた。

世末再來すでに耶蘇の宗教の片隅端末に屬し、寧ろ之と矛盾まで感ぜらるゝものならば、其が耶蘇の教たりとて重大視するを要せず、唯だ其が宗教の中に占めたる地位だけに重んずれば其で澤山である。若し其が吾人の宗教に於て價值甚だ輕きものならば之を最も輕んじてよく、若し全く價值なくば之を棄て去つて差支がない。凡て時代には時代の思想があり、信仰があるものである。人は知らず知らず其を礎とし物を考へるのである。其の時代思想が人類のいつの代にも眞理と思はれるものもあらう。然らば其はさう思はれる間は價值があるのである。けれども時代思想は、其の時代の事情の集合激搖に依つて生ずるものが多い。其の時代だけでは如何にも眞理に思はれるが、其の時代が移り事情が變つて來ると、次の代の人はもう其を眞理と思ふ能はず、どうして昔の人はあんな思想を抱くことが出來たのだらうと謂ふやうになる。こんな思想はどうしても壽命を時代に限られたものである。再來思想の如きは或時代には眞理のやうに思はれたが、永くさう思はれることが出來なかつた。今日之を眞理と思へといふのは實に無理な要求で、張高鹿を馬と言はせやうとしたと同じで、如何に威猛高になり、滿面朱を注ぎ皆を決して、なぜ我が言を信ぜぬかと叫んで人を屈服させた所が、ガソレオが

生命惜しさに法王廳で検査官の前に地動説を取り消しながら、地より立つとき小聲にて、矢張地は動いて居ると言つたやうに、人の心の顛はどうしても下りはせぬのである。誰か再來説を耶蘇の教の中心など誣ふる者ぞ。此れ耶蘇を誤り神の國を賊する獅子心中の蟲ではあるまいか。

八 有形的再臨は不道理

私は再來が聖書の中に教へてあつても必ずしも信するを要せず、更に押し詰めてたとひ其が基督の教たりとて必ずしも固守するを要せず、此れ基督教の片隅端末もしくは贅瘤だからだと言つた。以上は聖書に照し基督の精神に照らしての論斷である。然し再來思想にして何か吾人に價值があるならば其は時代思想でも、末の思想でも、乃至反基督教思想でも、或は一顧して可いかも知れぬ。價值といふのは吾人が其に道理を見出だし、又は其を信じて心に満足を覺え、又は生活に幸福を加ふることである。然るに再來思想は其の一つだになく、却つて凡てに反するものである。

先づ再來思想は全く不道理である。吾人の理性の上から見るならば全く問題にならぬ迷信である。基督が天より雲に包まれ形を具へて現はれて來るとか、死者がみな墓から出て來るとか、其を文字通りに信する人が、今の世界に有られるだらうか。再臨講演に集る人、果して眞面目に其を首肯して居るだらうか。私は其の幾人かを執へて問うて見たが、唯の一人もそんなことを信じて居る人を見出ださなかつた。皆な申し合はせたやうに、そんなことは信ぜぬが、唯だ他の教會で聞かぬことを聞くのが面白いので行つて見ると言ふ。中には何か獲る所あるかと思ひ行て見てあまりの亂暴無茶な信仰に

ハカヤロ
大いにか
決て居る
おるよを

由來説を
否定する
事を知りぬ
と云ふ
外は

喫驚し、正しく靈的な基督教を聞きたいと言つて、他の教會に奔り入たものもまた幾人かあるを知つて居る。されば再臨説は信ぜられて居るのではない、弄はれて居るのである。勿論其中には眞面目な者もあらうが、其は如何なる性質の人か推察に難からぬ。

基督が有形的に再來するならば、其の肉體は矢張物質でなくてはならぬ。其が決して人の心の作用に依つて見える幻でないことは彼等の主張である。然らば其の肉體は何にて組織されるか其時新に空中の物質的要素を凝結して出来るのであるか。其でも其の手續が可笑しい。人間の身體は二つの細胞の結合に依つて成つた新細胞が、分離し分離して此の大なる複雑の身體になつたのである。然るに新に再來する基督はそんな手續を経ずして初から大人の肉體を取る事になる。然し再來の時新に肉體を取るのではなくて、多分は第一降誕の時の肉體が、死から復活して其のまゝ、残つて居るのであらう。さすれば今はどこに在るか。天にあるか。天に在るとすれば天は空間を具へた物質的の國でなくてはならぬ。神は靈なりとあるのに基督は肉體を以て天に在り、空中の何處かに物質の國に住んで居るのであるか。天國もさうして見ると物質の宇宙の局部を成して居る次第である。再來の信仰の內容を一々考へて見るがよい。何一つ笑ふべく厭ふべき、無知の、物質的思想でないものはない。甚だしいのになると、世の終に基督は天から来るから、日本では飛彈の高山に一番先に來ると唱へたものもあつたといふ。先年末世の福音といふ雑誌には、薩摩の櫻島が噴火したことや、ハレー彗星が現はれたことや、更に神田三崎町に大火のあつたことや、そんなことを世の終末の徴候だと麗々しく書き立て、あつたのを記憶する。同じ再臨派の中にもまた多少の色分はあるだらうが、大抵五十歩百歩

の差別である。こんなことを一々指摘して行つたら其こそはてしはないが、あまり大人氣ないことになつて仕舞ふので此方が恥かしい。

先頃も基督が雲に乗つて來るといふ其の雲に乗るといふ語について議論があつたとか聞た。誰か再臨思想を批評して雲は蒸氣の結んだものではないか其に乗つて來られるかと言つたさうである。此の批評も適切とはいへぬが、其に答へて、雲は蒸氣の雲ではない、聖徒の群勢のことだらう、パウロの言にも我等多くの物見人に雲の如く圍まれたりといはれあるからと言つたといふに至つては、牽強附會も至れり盡せるもので、寧ろ滑稽をも通り越して居る。そんな事を言ふと聖書を聖書通りに信ずることだけでなくるを忘れて居る。聖書のどこに雲は聖徒の群のことなりと書てあるか。曾て獨逸のバウルスやハーゼなどの唯理派が、聖書の記事を悉く自然的に解せんとし、耶蘇が湖上を歩んだといふは湖畔を行つたことである、耶蘇が復活したといふのは弟子等が幻象を見たのであるといふ風に説いたことがある。此は間もなく人に棄てられた見方であるが、乘雲を聖徒の群に圍まれることなど解するものは、全く此の唯理主義の説き方と同巧異曲のもので勝手の解釋、實に合はぬ思想たるを免れぬ。もし乘雲をそんなことに解せば、聖書全篇の字句を同様に解して差支ないことになる。聖書は決して其様な書き方をしてある例がない。波の上を歩むも、五つの麵麩で五千人を養ふも、雲に乗るも、確に其のまゝに意味を取るべきものであることは申すまでもない。然し乘雲をそんなことに解するのは、既に之に蹟を感じ心の折合はぬを覺えるからであつて、既にさうなつて之を詩的に解せんとするのは、一波動いて萬波動く、一石抜けて全壁崩れるの理で、やがて再來とか肉體復活とかの信仰の全瓦

解に到るべきを豫表するものである。乗雲が信ぜられぬならば再来がどうして信ぜられるものか。

再臨の信仰は全然一時の要求より出で、之に理を伴はぬ信仰である。猶太の世末思想も基督教の再来思想も、其の周囲の壓迫があまりに甚だしいので、此世に絶望し、天より救の來るのを待ち望んだ所から起つた。今日の之を唱ふる人また同じことを言つて居る。曰く世界は段々悪くなる、大戦争も起つた、米國のみは此の大罪惡に手を汚すまいと頼んで居つたのに其も空となつた、世界は墮落するのみ、善くなる望はない、茲に神の宇宙的干渉が起り、天地を顛覆し世界を一新せねばならぬと。物が要求通りに行くものならば成程再来もあるであらう。元來幼兒や野蠻人は、何でも物は自分の有てもらひたいと思ふやうにあると信ずる。今日でも情意のみ馬鹿に發達して、知力の其に伴はぬ人は、矢張物は自分が斯くあつてもらひたいと思ふやうにあると信ずるものである。神の信仰の如きでも、神はあつてくれなくては困るではないか、だから神は有ると信ずるといふ。再来をもそんな筆法で信ずる。然し物はさう自分で有りたいたいと思ふやうにばかりはない。眞實は要求通りには出來て居らぬ。再来も彼等は要求するだらうが、有るべからざることをゆゑ有られぬのである。斯く再臨の信仰はどうしても道理に合はぬ。

再臨説主張者のやうな質の人は、道理でもつて詰められると、直に宗教は理窟ではない、理窟では分らぬ、宗教は直覺でなくては分らぬ、或は神秘である、或は超自然であると、必ず言ひ出すのである。其の言だけは眞理である。宗教には直覺も神秘も超自然もある。其點に於ては私も敢て再臨派などに譲らぬ積りである。然しながら宗教が全く理と合はぬものであつてはたまらない。理性を殺して

仕舞はねば信仰の出來ぬものであつては人を人ならぬものにして仕舞ふのである。其では人を救ふものでない。人を不具な人格にする者である。宗教は當り前の人間であつて信ぜられるものでなくてはならぬ。矢張どこまでも理に合つて、如何に學問のある人でも、ちやんと安んじて信ぜられるものでなくてはならぬ。理性以上のものを以てせねば分らぬ所はある。知識以上の所もある。けれども理性と反したものの、知識と相容れぬものではない。根本から理に合はぬものは必ず偽である。何となれば理性も神の作つたものだから。理性は人間の性の惡なる所ではない、推理は罪ではない。基督教の代々の聖人は大いに理性を用ひて神の用をして居る。理性あつては信ぜられず、理性を殺さねばならぬやうなものなら、基督教は福音ではない。喜びの音づれでなく苦の音づれである。人は非常なる重荷を負ひ軛を負うて信仰するものであつて、基督が我が荷は軽く我が軛は易しといはれたことは嘘になる。それともどうしても理性を殺さねば基督教を信ぜられぬといふならば致方もないが、耶穌の教は有形的再臨を信ぜずともよく、有形的再臨に反對した靈的再来も天國の漸々の發展も明白に存在して居る。此の平易明快にして人を幸にする耶穌の教を信じさへすればよいではないか。何を苦んで再臨の如き譯の分らぬ無理の信仰を奉ぜねばならぬか。

再臨論者の説を聞けば、道理でも不道理でも聖書の言だから信ぜねばならぬといふ。然し聖書の教は其の全體の精神から見ても有形的再臨に反對の方角を強く明に指し示す。そこで結局は再臨派は道理は何でもよい、聖書全體は何と言つてもよい、俺は有形的再臨を唱へる、俺の説に従はぬとは怪しからぬ、惡魔と外道と異端と僞善者と呼ばるのである。然し道理を無視し聖書の精神、基督

の精神を無視し、飽くまで自説を通さんとするのは、横に車を押す者であつて、他は許しても私は押させぬ、神は尙更押させぬ。

世人は再臨説の如き譯の分らぬことを言ふを神秘的だと稱し、何だかそこに隠れた意味と價がありさうに想像するが、是れまた全然の迷妄である。元來神秘といふは譯の分らぬことの謂ではない。さういふ意味も全く無いではないが一面であり劣等の點である。神秘といふのは人が己れの靈を以つて直接に神に交はり基督の靈に接することである。斯く人の靈が神に憧がれ神に流れ行き神と直接するに依つて、神の生命に觸れ、又耶穌の生きた靈と合一し、神の内に充つる聖の徳、基督の内に溢るゝ愛の徳を流し入れられる。此に於て自己も内部に美はしい心を持ち、思ふ所神らしく行ふ所基督らしくなる。此が神秘であつて又神秘的交通である。かゝる意味に於ての神秘は再臨派の如きものには絶えてない。又ある筈がない。何となれば彼等には凡てが物質的である。神國は或る空間を占めた國である、基督は今も肉體を持つた神の子である。其他萬事が物質的である。之に神秘といふ如き純然たる靈的のことがある理がないのである。あらば矛盾である。然り彼等の唱ふる所を點檢しても、荒唐無稽のことは充滿して居るが神秘といふものは更でない。

九 再臨説は不虔不信

單に道理に照らして信ぜられぬものたるのみならず、最も敬虔を装ひ篤信を誇號する再臨派の信仰は、其の實最も不虔不信の思想であつて、耶穌基督の宗教と氷炭相容れざるものである。

26/10/11
後日クリにありテ

世界が段々悪くなつて行くばかりといふ見方からして純理に合はぬは勿論だが、何よりもはや基督教的でない。全くの異端である。基督は人類を見限らなかつた。悪くなるばかりと思はなかつた。もしさう思つたら其の死は殉死だと感じた筈である。我が来るも人を使はんためにあらず却つて人に使はれ又多くの人のために生命を棄て贖とならんためなりと言つた。一粒の麥もし地に落ちて死なすは唯だ一つにてあらん、死なば多くの實を結ぶべしと言つた。基督の救は人類の間に擴がり行きて、救はるゝもの益々多く、其の死は人類を贖ふ所以であることを觀たのである。天國は芥種の如し、萬の種よりは小さけれど長じては空の鳥來つて宿るほどになると言つたのも此の意味にも取れる。耶穌の思想の全體は此の主義で立つて居る。此れが人類の漸々衰亡墮落を信ずる再臨派とどうして合はう。基督は此の確信を持つて居るから、世の滔々たる罪惡の中に立ち、孤身之と戦ひ、人類に救を流し入れつゝ、身は十字架に殺されながら、我れ世に勝てりと叫んだのである。世は再臨派の言ふ如く悪くなつて終る筈のものでない。少くも基督は之と正反對の見方をした。

又世に罪惡が瀰つて居ればとて、其が到底精神的の方法を以て救へぬものであらうか。これも基督の精神とは反對である。基督は不信邪惡の時代の中に、少數の弱い卑しい弟子等を率ゐ、新らしき群を造り世界を拓いた。基督一人より何等強制的なことをせずして救は全地にひろがつた。僅に十一人の弟子の人格から教會は地の隅まで發展した。神の力は實に驚くべきものがある。此れまた然かあらねばならぬことである。そこでたとひ今如何やうに暗黒なりとも、眞面目なる神の子一人だにあらば、終には千人となり一億となり全人類とならぬ筈はない。神はかゝる活動をなし得ぬと斷定する

か。さりと人は人を見限つたのみならず神を見限つたものかな。人を信用せぬと共に神を信用せぬものかな。然り再來思想は神の物力を信じて其の靈的能力を信ぜざる不信より起つたものである。

然し何よりも再來思想の不信なる所以は、耶穌基督を再來まで心からも世界からも閉ぢ出してあることである。基督が若し吾人の間に今住んで活動して居るならば、既に再來して居るので有形的再來は無意味無用のことである。そこで彼等はどうしても基督は現在我等と共に在さぬことと思つて居る。此れが彼等及び多くの基督信徒の信仰の一大缺點である。確に雲に乗つて再來するやうな基督は、今は遙か遠い天といふ所に在るのである。そこで吾人を知つては居るか知らぬが關係は直接でない。基督の靈が吾人の間に動いて、其の至聖至愛の心を吾人の内に流し入れ、吾人の内に聖と愛を泉の如く湧き出ださせ、之を永生に至らしめつゝあるといふやうな信仰を持つことが出来ず、其の經驗その意識に至つては全くない。然しパウロやヨハネには基督は如何に關係したか。決して彼等を離れて居たものでない。パウロの内に在た、パウロは自分の生きて居るのは自分でなく基督が生きて居るのだと感じて居た。ヨハネは神と基督と自分等とは全く一つに合つたものだと思つて居た。此れ眞實の基督教經驗である。此が救の經驗である。之を知らざるものは哀れむべし。確に基督の救の力を受けて居らぬもので、共に基督教を談じ、共に宗教を語るに足らぬ者である。再臨主張者の一人は曾てダイスマンの使徒パウロを讀んで之に傾倒し、聖書について善き書物は此の書であるとして激賞したとかいふ話を聞したが、あんな物でも繰り返して其の心で讀んで見たら、或は五十九年の非を悟る所があるであらう。若し基督の現に吾人と共に在ること、其の活動して居るといふ貴重の信仰、基督

教の心臓たる信仰を抱いて居るならば、再臨説は唱へられぬ。唱へても唯だ軽く觸れる位である。再臨説を誇大に唱へるものは此の至深至大の信仰を有せぬものである。

十 再臨は不必要

然も有形的再臨が吾人に必要ならば尙此の信仰は幾分の價值であるであらう。然し吾人は絶えて其の必要を感じぬ。元來再臨を望むのは、一に神の終局的干渉の要求、二に基督の全勝の要求、三に善惡の審判の要求から來て居る。彼等の説を解剖して見れば此の三つの事がなくてはならぬから再臨があるべきであるといふに歸着する。然し此等の要求は再臨なくとも充たされるのである。再臨の必要は更になし。

第一の要求について言へば、再臨論者は世界は決して善くならず悪くなるばかり、吾人は如何に努力しても到底惡の力の勝利に追付かぬ、其故基督が天より來つて神力を以て世界を顛覆し新天地を造らねばならぬといふ。然し果して世界は墮落して仕舞ふものであらうか。其が先づ疑問である。がそんな腕力の干渉を以て全世界を顛覆せねば基督は勝利を得られぬであらうか。もしそんなものならば再臨といふやうなことは今日まで延引せぬであらう。どうせ悪くなるばかりのものを長く見棄て、置くことはあるまい。然るに神は氣長に世界に活動し、基督を降し、聖徒を生じ、而して人類を感化しつゝある。否そんな天地顛覆を行はねば神の國が立たぬものなら、神は基督の再來など言はず、第一降誕の時に、猶太人の希望して居たやうに基督をして天の大軍を率ゐて世界に殺到させ、世界の有

らゆる悪人ばらを征伐させ、一擧に國を立てたに相違ない。然るに基督は大工の家に生れ、苦勞多き一生を送り、小民の間に傳道し、卑しめられ辱しめられ、終に十字架にかけて殺された。此れは神の國が精神的のものであつて、人格より人格に傳はつて行き、新生命として人類の間に流れ行はれ、終に全地に及ぶべき性質のものである。既に神の國がこんなものであらば、世末的メシヤ來襲の必要は一向ないのである。否それは却つて基督の主義に背いたもので、神自らそんなことをなし、基督自らそんなことをなすならば、矛盾極まることをするので、神の國は自滅するのである。

次に基督の全勝といふことも豈に世末メシヤの襲來を要せんや。基督には大いなる力がある。初は十一人の弟子より外なかつたものが、次第に其に臣従する者が増加して來た。今日とても十一人や二人ではあるまい。再臨派は自己等の仲間が世界に大分あると稱して居るであらう。其だけでも基督の時代、使徒の時代よりは多數である。ゆる／＼か知らぬが世界は進歩したに相違ないではないか。基督の心が行はれ増さつたに相違ないではないか。此の調子で行かば遠い未來か知らぬが基督の勝利は來るにきまつて居る。基督の一たび世に現はれ、無比の徳を以て世に生き、二つなき犠牲として死なれた方は、世界から消滅しはせぬ、それはます／＼作用して全地全人類に及ばねばならぬ。神の靈的活動は基督の事業を人類の間に普遍させねば己まぬ。再臨論者は其を信ぜぬのであるか。基督は世末襲來などそんな殺伐な兇暴なカイゼル流な手段を取らずとも、其の靈の力に依つて必ず全勝する。有形的再臨は其方から考へても必要はない。

第三の點たる審判も或る形を以つては必ずあるものに相違ない。然し其が聖書の所々に見えるやう

六十一〇五十五
一ニナニ

に基督が再來して、凡ての死者一時に甦り、基督の臺前に出で、善人と悪人と截然二つに別たれ、牧者が家畜の大群より綿羊と山羊とを別ち、農夫が收穫の中より麥と毒麥とを別つが如く、一は永遠の祝福に入れられ、他は滅亡に投ぜらる、とあるを文字通りに實現されるものであらうか。あまりに古代的の信仰ではないか。あまりに子供らしい信仰ではないか。これも今の學者や多少思想のある信者で、再臨派のやうに信じて居るものがあるものでない。其とも文字通りに信ぜねば信仰が立たぬとか要求が充たされぬとかならば、止むなく信するであらうが、審判はどんな形であつても吾人には影響がない。神を信するもの、善をなすものは、必ず限りなき祝福を與へられるに相違なく、神に逆き、罪を犯し、他人を悪口難言したり無暗に壓迫虐待したりするやうなものは、いつか其だけの報復を受けるに相違ない。罪には必ず其に應ずるだけの報はなくはならぬのである。勿論誠心を以て悔い、過去現在を非認し、神に向つて懺悔し、心を全く向けかへて基督にすがり、神を念ひ、之にあこがれ今後再び此罪を犯すまじと決心する者は、神は其の罪を赦し、たとひ其までの罪果が山の如くなるも汚れが紅の如くなるも、之を問はずして愛子として取り扱ふに違ひない。此れが基督教の神觀天父觀に離すべからざる赦罪觀であつて、天地は自然でなく法律でなく愛で支配されて居るを觀また經驗して起つた基督の宗教である。が其は赦しであつて、賞罰が全く無いといふ意味ではない。神が人格であり、性格があり、天地に理があるならば、賞罰は必ずなくてはならぬ。然し其の賞罰はいつ來るか如何なる様で來るか、吾人は其所まで知らずともよい。又知り得べきものでもない。無理に知らうとするのは、人間の知力に超えた過分の要求をなし、神のみの知り玉ふ所を無理に窺ひ知らんとするも

神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ
神に委せよ

ので不敬である。いつ如何なる形で賞罰あるも其は全く神に委せておかばよい。其が一番信仰ある人の態度、神の子供らしい態度である。吾人は基督の肉體再臨を信ぜぬが、しかし審判といふものをば信ずる。故に此の方面からも肉體再臨を信ずる必要を更に感ぜぬ。

尙審判を信ずるといふと、再臨派ならぬ人々の中には、直ちに其をあまり舊式の信仰と断定する人もあらう。其は私には構はぬが、然し其は文字に囚はれたものである。審判といふことにも意味が色々ある。仔細は他の文書に明であるが、以上述べた所だけでも、熟考するならば大抵明瞭だと思ふ。

以上私は吾人の要求から言つて有形的再臨の要を認めぬことを言つたが、神の方から考へても再臨の信仰の必要はなく、神は吾人に再臨の信仰を要求せぬと信ずる。神は再臨を信ぜぬ人を救はぬとは言はぬ。基督の言にも無論そんなことは無い。思ふに神は吾人が世末が来て基督が有形的に再臨すと信ぜずともよしと思し召すに相違ない。神はそんなことを問題にせず、吾人に耶蘇基督の無二至大至潔の人格を慕へよ、之にあこがれよ、之と合一して、其の靈を受け入れよ、かくて基督と同じき神の子となれ、神の子の生活を生きよ、さすれば汝等は至幸至福である、我は汝等の父である、汝等と一體であると仰しやるに相違ない。たとひ有形的再臨を待て居た所で、基督の靈の流入を受けず、始終不平不満であり、始終人を敵視し、我儘一片傍若無人のものゝ如きは、神決して之を救ひ玉ふまじと思ふ。神の方より考ふるも物質的再臨の信仰は全く不必要である。

されば有形的再臨の信仰は吾人に全く不必要である。而して其は不道理であり、不信仰なるものであつた。さうして見れば再臨説は全く價値のないものである。

主の再臨を信じて待つて居る人々の心は、実に憐れむべき者である。

十一 再臨説の害

茲に至つて再臨説の影響利害を考へねばならぬ。吾人は聖書學の上より、宗教哲學の上より、宗教其自身の上より有形的再臨思想を排斥して來たが、其でも若し此の思想が害よりも利の多いものであるならば、或は之を寛恕するかも知れぬ。が價値が上述の如き再臨思想に固より利の多からん筈はな

勿論再臨思想が基督教の上に幾分の好影響を與へたことないではない。主の再來近しといふ信仰は人を眞面目にすることはあるかも知れぬ。肉慾に現を抜かし、世上のことを追ひ求むるに急なるものは、世末再來を思へばそんなことはして居られぬ。パウロが夜すでに更けて日近づけり故に暗黒の行を棄て光の甲を衣るべしと言つた通りである。事實基督教會は此の信仰に依つて嚴正の風を興した。之と共に再來思想は迫害苦痛に堪ふる心をも興へた。今受くる苦は間もなく榮となるべし、今暫しの忍耐なりと言つて惱みに堪へた。今一つは基督教無抵抗の道徳を助長した。仇をかへすは神にあり、其も間もなきことなれば惡を以て惡に報うるなといふ精神を作つた。今でも眞面目に再來近しと信じ得ば此だけの利をば受くるであらう。若し再臨論者にして少しの苦痛にもいら／＼して居耐らず、焦燥煩慮したり、他より少しでも損害を受ければ百倍千倍にして報復したり、惡に抵抗するのみか、此方より挑戦するやうな者があるならば、其は再臨信仰の功徳をば少しも蒙らずして弊のみを受けた者で、益々價がない人物である。

再臨の善影響に至つては右の些少の利を以て償はれるものでない。總じて再來思想は世に絶望したる精神の産物である。猶太の基督教の共である。世界は到底善くなる見込がないから再來なかるべからずといふは如何に哀れなる聲なるぞ。斯かる思想は厭世者のものにして世を厭世にする。再來思想は時代にあつた厭世思想を保存し之を發達させた。此れまた學者の一齊に言つて居る所である。確に再來思想は現在を輕んじ蔑にし、世界の前途を信ぜざるが故に、世を立派にせんとする志を失はせ、何もせずして只管未來を待つて居るに至らせる。永久的の事業の如きは手につかぬ。歴史家は十二世紀まで會堂の大いなるものが建てられなかつたのは、千年代が基督再來の時と思はれて居たからだといふ。再來を待たば他の事業でもみなさうなるのである。又再臨説では吾人個人の能力が世界を改善し得ることを信ぜぬことになるから、自ら信ぜず任せず、他人をも信ぜず之に任せぬやうになる。又人間の努力も他人を動かさず、歴史を動かさず、人類にも神の國にも漸々の發展といふものなく、唯だ神の一撃に依つてのみ世界が新になると信するのであるから、全く投機事業に従ふ者と同じ心になつて仕舞ひ、着々神の國に寄附して行くといふ心は失はれて仕舞ふ。

再臨思想は人性の上にも文明の上にも大害がある。理性といふもの、聲を全く抑へて仕舞ひ、理では思はれぬことを唯だ信ぜよといふのである。これは實に恐ろしい結果を來たす。外には凡て理性を呼び醒ますやうなものを凡て閉ぢ出す。書物を読む賢き人に交はるなといふ。自分自身の理性が醒めて信仰を疑ひとめると其は惡魔の囁きだといふ。かくて人心を常に癡醉劑にかゝつたやうにして、つまり世に一人並の思想のない不具者ゝくれ者として保存しやうとする。もし理性では信ぜられぬけれど、聖書にあるから信じたことにするなどいはい、其は自己の分裂して居るもので、虚偽をなし二重人格を有するものであるか、さなくば苦痛煩悶にたへられぬのである。こんな人々の社會では文明は進まぬ。學問も藝術も呪ふべきものとされる。勿論當今の學問や藝術が何程人類に自然の又必須のものであるかは疑問だが、再臨派になると正當の文明さへ非認せずには居られぬ。

信仰其自身に受くる害に至つては最も甚だしい。基督を天に在りとし、之を偶像視し、唯だ其の名を唱へ、其の稜威を崇むるのみで、自分の靈性が之に直接することがないから、基督の吾人と共に在る慰を感じず、其の聖と愛との流入を受けず、基督信者として甚だ生命なき者となる。彼等の中の一派は聖靈の潔めといふ如きことを口にすが、其の聖靈は基督の靈と一體でない、基督と對立したものであるから、聖靈の内容がさつぱり分らぬ。そこで聖靈を受けると言つた所で、内容の空虚な靈に憑られるといふだけなので、彼の異教の憑靈者、巫子、口寄せの匹たるより以上に出でぬ。何か尋常ならぬ不思議な様子にでもならねば聖靈を受けたと思はぬ。さうなりさへすれば人物がどんな低いまゝに留まつて居やうが、どんな悪いことをしやうが聖靈が宿つて居るものとされる。或は聖靈に多少深い徳のあることを思ふ者でも、辛うじて世に在るもの即ち肉體の慾、眼の慾、目の慾また勢より起る驕傲を潔められるといふに止まり消極的である。基督の靈に充たされて人を愛し世界を改造して行くといふ者に比して其の能力感化とこれが質著しく劣つて居る。斯く言はば我等の信する聖靈は仁愛喜樂慈悲良善其他の果を結ぶものである、内容の無いものでないといふ者が思ひついて何處かに起るかも知れぬが、其等に對しては基督は、汝の答へ然り之を行はば生くべしと宜たまふであらう。又神

再臨の善影響に至つては右の些少の利を以て償はれるものでない。總じて再來思想は世に絶望したる精神の産物である。猶太の基督教の共である。世界は到底善くなる見込がないから再來なかるべからずといふは如何に哀れなる聲なるぞ。斯かる思想は厭世者のものにして世を厭世にする。再來思想は時代にあつた厭世思想を保存し之を發達させた。此れまた學者の一齊に言つて居る所である。確に再來思想は現在を輕んじ蔑にし、世界の前途を信ぜざるが故に、世を立派にせんとする志を失はせ、何もせずして只管未來を待つて居るに至らせる。永久的の事業の如きは手につかぬ。歴史家は十二世紀まで會堂の大いなるものが建てられなかつたのは、千年代が基督再來の時と思はれて居たからだといふ。再來を待たば他の事業でもみなさうなるのである。又再臨説では吾人個人の能力が世界を改善し得ることを信ぜぬことになるから、自ら信ぜず任せず、他人をも信ぜず之に任せぬやうになる。又人間の努力も他人を動かさず、歴史を動かさず、人類にも神の國にも漸々の發展といふものなく、唯だ神の一撃に依つてのみ世界が新になると信するのであるから、全く投機事業に従ふ者と同じ心になつて仕舞ひ、着々神の國に寄附して行くといふ心は失はれて仕舞ふ。

此書は再臨の善影響に至つては右の些少の利を以て償はれるものでない。總じて再來思想は世に絶望したる精神の産物である。猶太の基督教の共である。世界は到底善くなる見込がないから再來なかるべからずといふは如何に哀れなる聲なるぞ。斯かる思想は厭世者のものにして世を厭世にする。再來思想は時代にあつた厭世思想を保存し之を發達させた。此れまた學者の一齊に言つて居る所である。確に再來思想は現在を輕んじ蔑にし、世界の前途を信ぜざるが故に、世を立派にせんとする志を失はせ、何もせずして只管未來を待つて居るに至らせる。永久的の事業の如きは手につかぬ。歴史家は十二世紀まで會堂の大いなるものが建てられなかつたのは、千年代が基督再來の時と思はれて居たからだといふ。再來を待たば他の事業でもみなさうなるのである。又再臨説では吾人個人の能力が世界を改善し得ることを信ぜぬことになるから、自ら信ぜず任せず、他人をも信ぜず之に任せぬやうになる。又人間の努力も他人を動かさず、歴史を動かさず、人類にも神の國にも漸々の發展といふものなく、唯だ神の一撃に依つてのみ世界が新になると信するのであるから、全く投機事業に従ふ者と同じ心になつて仕舞ひ、着々神の國に寄附して行くといふ心は失はれて仕舞ふ。

の國又は天國についても、彼等は之を有形的に考へるから、現在神の國が在ることを思はなくなり、自己の心を神の支配に委せ、基督の活動に委せて、茲に神の國を現出しやうともせず、家庭を基督の住む所、神の國とすることにも氣つかず、國家社會に基督の精神を實現して、出来る限り神の國としやうとも志さず、信仰の合へるもの同志が、互に一致團結して神の國を地に現はし教會を造らうとも思はぬ。又吾人の未來世も有形的にして従つて其の幸福も肉慾的と思はねばならぬ故に、靈の幸福といふものを十分理解せず、又之を味ふこと能はずして終り、神の子といふこともたゞ名稱として知るのみとなるのである。尙最も大なる害は前に言つたやうに神が人を救ふ活動は此世ではないと思ふ故、不虔に陥るのである。有形的再來思想は基督教ではない。

最後に有形的再來思想は基督教の傳道にも有害である。世人は之を聽かばその迷信に呆れて、こんなことを信ぜねばならぬならば基督教が信ぜられぬとするは當然である。此の思想のために人を躓かせ、救はるべき多數の人をも逸し去るは勿論である。其他多くの點に有害であらう。有形的再來思想は知力と常識との人並ならぬ人には一利あつて、普通の人には有害のみである。

十二 有形的再來思想の宣告

以上の批評に依つて分るであらうが、有形的再來思想は人間を解せず世界を解せぬ思想である。人間は理性を持つて居る、そんなことを信ぜられるものでない。世界は判斷がある、そんな思想の通るものではない。また有形的再來思想は靈といふものを解せぬ思想である。一から十まで凡てが物質的であ

り物慾的である。彼等は死だ基督はほしくない生きた基督を信ずるといふさうだが、其の生きたといふのは肉體を以て虚空を徘徊する意味ださうだ。肉體を持たねば生きては居らぬか。約翰傳の基督について篤信の學者は生ける基督だといふ。其の意は著者の靈が基督の生ける靈を經驗してその經驗に依つて書いたから言ふのである。再臨論者に言はすれば約翰傳著者の經驗した基督は死だ基督である。然し肉體を持つて居なければ死で居る者なら神は死で居る譯である。神の肉體には誰もさばつたものはあるまい。

次に有形的再臨論者は聖書を解せぬ。一字一句に拘泥するやうな人、あちらの矛盾、こちらの撞着を一々細かに調和しやうと縋つて居るやうとして、聖書の精神を捕へることを忘れて居るもの、其が聖書を解して居る人と言へやうか。吾人は人から手紙を受けた時、一筆啓上も、時候の挨拶も、肝腎な中心の用向も、其を同一價值と思はぬ。中心を見て取り、他の點は忘れてもかまはずに居る。聖書を神よりの手紙としても、また中心を見て其を解すべきであらう。どこも此所も、一字も一句もみな中心だと言つたら、神は吾人に全く呂律の合はぬ手紙を送つたことになる。次に有形的再臨論者は基督を解して居らぬ。彼等は基督の一言一句を見る、然し基督の全體を見ぬ。彼等は基督の言語の末を見る、然し基督の精神を見ぬ。基督は聖書を一言一句そのまゝ矛盾も不道理もつゝ信ぜよと言はぬ。基督は再臨を待つて居なくては救はぬとも言はぬ。基督の人格はもつと生きて居る、もつと高い潔い、基督の教はもつと吾人の生命に關係がある。

又有形的再臨論者は基督の救といふ重大なものを解せぬ。彼等には救は其の謂ふ所の天國に入れて

くれることであらう。然し基督が唯だ人を天國に入れるといふことを目的とし之を救と稱したかといへば左様でない。基督は人を神の子とすることを救として居る。未來まで待つて居らぬ。基督は自らの中に充つる神の子の精神を、その接するペテロやヨハネやザアカイやマリヤに注ぎ入れて、彼等の内に己と同じ心神を父と信じ之に信頼し、之に事ふる心を湧き出でさせた。又他人を愛し他人を靈的に幸福にするために志し死をも厭はぬ愛を起させた。彼自身の内に溢れて居る生命が弟子等に這入つたのである。基督は之を新生命と稱し、之を持ちさへすれば神の子であつて、不滅であつて、至福である。未來も安全であると宣たまはれた。たゞ基督を主よと呼んだとて其は弟子ではなく救はれる者でないと言つた。再臨論者もし救をこんなものと解するならば有形的再臨など唱へられまい。彼等は斯く解して居らぬ。然らば果して基督の救を解して居ると言へやうか。基督に救はれたと言へやうか。

有形的再臨論者は第一宗教を解して居らぬ。彼等には宗教は聖書の所載を承認することである。聖書の字句を誦んずることである。日本人の宗教といふものは兎角かうなり易い。所謂「教」を信ずるのである。けれども宗教はそんなものではない。特に基督教はそんなものではない。聖書は吾人の師とはなるだらうが、聖書を知り之を誦し其言ふ所をさうだとするのでなくて、聖書の教へ示す神に接するのである。基督自身に合一するのである。基督教の信仰といふ字は、決して再臨論者のいふやうな意味ばかりでなく、基督にあこがれ、基督にすがり、基督の靈の大洪水の流入を受け、我れ基督の内に入り、基督我が内にありといふ意識に達することである。再臨主義では此は得られぬ筈である。斯く

基督と一體となりて、基督と同じく基督と共に、天父を信じ之に委せ又其の心をなすつゝ生きて行くこと、基督と一體として人を心から愛し、之がために己れを獻け、萬事基督思うて自分思ひ、基督動いて自分動くやうになる。此が基督教である宗教である。基督の宗教これではないか。パウロの宗教これではないか。恐らく再臨主張者が此れまで宗教として説き來つた所、人に教へ來つた所、こんなものではあるまい。全く生きて居らぬ教義でありはしなかつたか。

以上所述の如く有形的再臨説は形に拘泥した思想であり背反した思想である。基督の時代にパリサイ人と教法師といふがあつた。何れも熱心な宗教者であつた。彼等は舊約聖書に曉通し、猶太の歴史法律習慣を精知し、その一點一劃も遺すべからずとなし、非常に嚴密に之を守ることを努め人にも斯く教へた。彼等は自ら萬人の師と思ひ、義人と思ひ、最も神の心に適つた者と思ひ、たやすく神よ我は強索、不義、姦淫をせず、又この税吏の如くにもあらざるを謝すと言つた。彼等は少しでも聖書を自由に解釋したり、また其の一點にでも觸るゝ者があるときには、鼓を打つて之を犯罪異端と責め立てた。當時の人民も彼等に服して居た。けれども獨りバプテスマのヨハネや耶穌基督は彼等を何の價もなきものとした。基督の目には彼等は聖書の文字を知つて其の精神に通ぜぬもの、儀式禮典に詳しくして神を知らぬもの、律法の端々を嚴守して神に義とせられぬものであつた。基督は重ね／＼あゝ禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よと言はれた。聖書の形體に拘泥し、宗教の外面に執着するものはいつの世にも斯うなる。

パリサイ人と教法師とは徒に舊約をあさり、救主はダビデの家系に生るゝとか、ベツレヘムに生れ

るとか、天よりの徴候があるとか、そんなことを信じて之を待ち望んで居た。然し耶穌は基督として極めて微かに極めて精神的に世に現はれた。彼等はそこで之を信ずることが出来なかつた。今尙教主はまだ来て居らぬと思つて未來に待つて居る。第一降臨に於てかくの如き徒が多かつた如く、第二降臨に關しても同じやうな者が多いのは哀れむべきである。降臨は疾くにあつた。然るに彼等は聖書のあすこ此處を指さし、基督は天より來るとか、何年後に來るとか言つて居る。宗教の外形に捕はれる者は古今同一揆である。

十三 基督教の中心點

私は遠慮なく有形的再臨説を批評して來た。基督は決して目に見えて再臨すべきものではない。再臨説は基督教の時代思想であり迷信である。基督教は再臨説を生じたが、此れは精神的要求が時代思想に依つて低劣の形となつて現はれたものに外ならぬ。故に其の精神的要求は同情すべく之を奉ずべきも有形的再臨説は一點取るを要せぬ。有形的再臨の如きは全然無視して立派なる熱心なる基督信者である。否却つて無視した方が基督にかなつた信者である。世人は一方には無理に之を信ぜんとしてはならぬ、之と共に他方には之があるがために基督教に關してはならぬ。基督教の中心點を取り、其の人を救ふ所に依つて救はれねばならぬ。

諸君は神を信ぜよ。神は天地萬物を存在させて居る根本の大精神である。此の精神は情あり意志ある人格であつて、吾人人類に對しては愛として働き、吾人を養ひ導き感化して居る。人は此の唯一の

神の子供である。之に生ぜられ之に育てられ之に感化されて居る。故に其の愛に頼り其の感化を一杯に受けて生きるならば何の間違もなく、一人の精神も、人類社會も、至幸至福であられる。然し人は此の理想状態より逸出して居る。自己の意志によつて神の意志に反して生活する。此れが罪で凡ての不幸禍害の本となつて居る。耶穌基督は神の性を其のまゝ有して此世に生れ、人を神の子とするために努力し、其のために十字架にかけられた。彼の教により人は神を知り、彼の靈の流入感化により人は新生命を與へられて新人となり神の子となる。基督の靈は今もいつまでも活きて盛に人を生れ更らせて居る。其故吾人は基督を念ひ之にあこがれ之に縋り、心を開いて其の靈を受け神の子となり、今生より永遠までの至福に入らねばならぬ。

此れが基督教の中心點である。二千年來基督教の教義は種々複雑になつた。けれども此の中心點はいつも同じであつた。二千年來基督教が人類を救つて來た所は實にこゝにある。此の中心に觸れることの近く多い信仰の箇條が大切なのであり、之に觸れぬ點はどうでも可い。再臨説の如きは此所より見れば全く無くてよいものである。願はくば讀者はそんな閑問題たり、迷信たるものに目をくれず、一直線に基督教の中心に突貫し、其の生命を取らんことを。

思ふに此書を読む人は、再臨についての信仰は無論のこと、總じて基督教といふものについて、私と再臨論者とは根本から觀念の立て方が異り、従つて宗教の實際が全く異つたものであることを見出だすであらう。此の基督教と再臨論者あたりの基督教とは全く重んずる所が別であり、其の入り方其の進み方、其の到達點が異つて居るのである。其のどちらが基督に合つたものであらうか、どちら

が眞に人を救ふものであらうか。其は第三者の判断に委せる。昨年の冬にも一人の大學生が洗禮を受けたが、其人が屢々告白することに、己れは年少にして基督教に接し、信仰の芽漸く長ぜんとして居た所を、中ごろ今の基督説主張者の聖書解釋に觸れて、次第に傍徑に迷ひ入り、其の説を喜べども心の底より之を信じ難く、煩悶の内に三四年をすごしつゝあつた、然るに今の正しき聖書解釋を聞き、今の基督教に接するに至りて、忽ち暗黒より光明に出でし感あり、何もかも然り／＼と領かれて、基督教はそんな信じ難く入り難く行ひ難いものではない、全心を以て信ぜられ、一々生活に實現して行かれるものであることが分り、曾て年少の日に解しかけて居た所が却つて正當の基督教で、其を眞直に深く進みさへすればよかつたのであつたことを發見し、今は重荷が全く取り去られた感があり喜悅で堪へられぬといふことがある。基督教は再臨論者等の説く如き、信じ難きものでなく、又人生に力のないものではない。讀者は眞實の基督教に接せんことを勧める。

基督信徒の中には再臨論について如何に考へたらよいか分らなかつた人もあつたであらう。再臨に限らず凡てさういふ種類の信仰は、決して拘泥するを要せぬものである。私は此小冊子の精神を取て、讀者がすべて生ける基督と接し、生ける基督教を實現するやうになり、基督教がこゝに世界にいつまでも徹底的感化をはたらかせるものとなりたいと思ふ。

再臨論者の中には、此の小冊子を読むでいよ／＼龍城の決心を堅くする人もあらう。或は反駁の勇氣を發揮する人もあらう。若し反駁あらば遠慮容赦なく試みるが可い。唯だ然し忠告して置くが凡て議論は飽くまで道理を以て争はねばならぬ。唯だ一から十まで獨斷の連發で一點道理を言はず、而して

果してさうか。然るに其の徒に其の言はらぬか

その言はらぬか

て己れの言ふ所に従はぬから異端だなどいふのは、自らを代々の迫害者の一人に加ふるものであつてどうしてもパリサイ派である。が其よりも卑しむべきは悪口雜言を列ねて反對論者を沈黙せしめんと目論むことである。再臨論が眞理と思ふならば道理で争うて勝てる筈。悪口雜言を溶せかけねば自説を護れぬやうならば其は既に自ら眞理と信ぜぬものであつて、全く敗れたものである。私の論評も随分無遠慮で其の主張者には氣の毒の點も多かつた。然し私は論者に對して何等の恩怨もなく行掛りもない。それで私は再臨論と其の信仰の心理に就いて批評して居るのみである。私は再臨論者に向つて眞理の闡明を目的とせんことを望む。日本では人民の道念甚だ高からず、一般に他人の惡を聽くを喜ぶ情がある。世間の新聞紙などには、曾ては此の弱點を利用して私行の摘發を以て勢力を得んと企てるやうなものもあつた。再臨論者にして其の所論之に類し、もし許發譏謗を除かば、説明も論理も何程も残らぬといふやうなことでもあらば、其は甚だしい非基督教的の所爲であつて、又一般道徳標準から言つても卑劣の極である。基督は必ず僞善者よ先づ汝の目より梁柱を取れと宣たまふであらう。と言て私は異端宣告も恐れぬ、悪口も恐れぬ。ルーテルも異端であつた、パウロも異端であつた。耶穌基督は異端の大將であつた。パリサイ派や猶太教化派やヨハン・エツクの徒から異端と言はれるのは私の名譽である。唯だ教會の多數が私と再臨派とどちらを異端とするか既に疑問であるし、基督がどちらを異端とするかに至つては更に／＼而白い疑問である。私に言ふに注意せよ

私は又決して惡罵も恐れぬ。私は神の前には罪人の首で恐縮して居る者であるが、再臨派などから見てさう惡口されるやうな材料を持つ程まだえらくなつて居らぬ。私は平素自分の生活の何所を發か

れても恥かしいことのないやうにと祈つて居る。孤立の傳道者として苦しい所は人に知られたくない點もある。然し其は許かれても差支はない。自分には寧ろ幸かも知れぬ。よし又どんなことを言はれた所で、其が嘘ならば如何なる悪口も私自身の價を一文も上下せぬのである。もし又私が其だけの者であるならば私は當然の取扱を受けたのである。一向かまはぬ。

が再臨主張者が妄に他人を卑下し、自ら誇るやうな材料は私も敢て劣らす持て居ると信ずる。パウロの言つたやうに人もし誇るならば私も誇り得る。再臨論者が自ら教會を造らずして潔白を誇るならば、私は不完全なる人間の結社たる自分の教會について相當に誇り得ると信ずる。再臨論者が富豪に愛せられぬことを誇るならば、私も何等富豪の恩によらずして會堂を建て得たこと、教會の内部に一人の富豪のないことを誇り得ると信ずる。再臨論者もし宣教師と關係のないことを誇るならば、私は未だ會て宣教師の教會、學校、事業に何等の關係のなかつたことを誇り得ると信ずる。再臨論者が諸教會より獨立して居ることを誇るならば私は教派に超越して居ることを誇り得ると信ずる。再臨論者もし諸教會より迫害されたと言つて誇るならば、私は迫害か何か知らぬが生くる望さへなくせられつゝ多年進み來つたことを誇り得ると信ずる。もし苦むといふことが尊いことならば私は再臨論者に比して劣らざるべき其をなして居ると信ずる。然し私はそんなことを名譽と思はなかつた。其は當り前のことである。私は寧ろ自分の徳の足らぬ故と思つて常に人と神との前に畏れ慎しむで居る。パウロの心の如く我は寧ろ弱きに誇らんと思ふものである、が再臨論者がそんな方面から他を責めるならば私も之に應ずることは出来る積りである。

然し再臨信者の中には此の小冊子を讀んで再臨必らずしも信ぜねばならぬものでないことを思ひ、其の非を認め、基督教の本義は再臨派の説くやうな所になかつたことを見出だし、生命の所在を始めて知つて之に趨くに至る人も幾人でも出来るであらうと信ずる。其があらば實に其人は幸な人である。私もまた此の小冊子を公にしたことの無益でなかつたことを喜ぶ。

此の書の校正中に平和條約の調印がすむだ。吾人はいよいよ新世界の人となつた。基督教はの新世界で徹底的に用を作さねばならぬ。私は基督が死にたる者に其の死にし者を葬らせ汝は往きて神の國を弘めよと宣たまふのを聞く心地がする。

本書ヲ今後復すべしナリ

を希す

昭和十三年

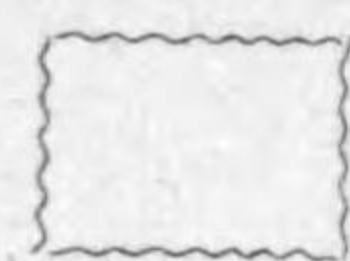
四月十三日

Both Uchimura
and Tomimaga are
no longer on earth
Let us kneel
and pray for
them.

大正八年七月廿一日印刷

大正八年七月廿四日發行

不
許
製
複



□ 定價金四拾五錢 □

著
者

富 永 德 磨

發
行
者

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福 永 文 之 助

印
刷
者

東京市芝區南佐久間町一丁目三番地
和 田 操

發
行
所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警 醒 社 書 店
振替口座東京五五三番

◇ 著 磨 德 永 富 ◇

基督教の根本問題

定價貳圓 □ 送料二十錢

『總論』「基督教の本質」「基督教の概念」「神の概念」「結論」の諸篇より成る聖書の註釋或は外國人の説を翻譯したるものは從來とても其數甚だ少からずと雖も、本邦人の手に成りし基督教に關する著書は多くは小冊子にして未だ秩序的に基督教に就て全般の諸問題を詳細に論述したるものを見ず。本書はこの缺點を補ひて餘あるものにして必らずしも歐米學者の説を紹介したるもの或は講明したるものにあらず、著者一己の理解したる基督教をば研究としてよりは、寧ろ宗教として、しかも理論的態度を失はずに論明したるものにして基督教の何たるを知らんとする人のためには、絶好の説明者なりといふべし。(東京朝日評) 再版發行

有神論 體系

世界に於ける
新有神論
わが國空前
の著作なり
好評再版

富 永 德 磨 著

菊判五百廿九頁
定價壹圓七十錢
送料金拾貳錢

有神論は宗教の根本、骨髄なり。之が確立せざれば、宗教は不安の裡に存し之にして真ならば、信仰は大磐石の上に立つ。而して宗教は忽諸に附すべからざるものとなる。著者は古今の宗教を究め現在の哲學を取り、それらを綜合して、爰に有神論の體系を樹立す。その思想の清新、理義の明白、文章の暢達、しかも信仰の氣の卷中に溢るところ、例に依て著者獨特の面目。されば苟も神明佛陀を信ずる人々の一讀を惜しむべからざる書なり。

□ 目書刊新店書社醒警 □

<p>有島武郎撰輯 ホイットマン詩集 四六判六十四頁 定價四拾錢 送料二錢</p>	<p>大橋房子著 イスラエル物語 四六判四百八十二頁 定價貳圓 送料十二錢</p>	<p>沖野岩三郎著 生を賭して 四六判二百二十七頁 定價九拾錢 送料六錢</p>	<p>アウトロック主筆 ラマイン・アボット著 竹崎八十雄譯 隣れる部屋 ボケット形百五十一頁 定價四拾五錢 送料二錢</p>
<p>靈の詩人、肉の詩人として自由奔放雄渾偉大なる詩を遺せるホイットマンの代表的若くは特色ある詩を有島氏が撰輯せるもの。綠蔭水邊に携へて愛誦するに最も妙。</p>	<p>嘗て婦人矯風會が賞を懸けて「男女貞操論」を募るやこれに應じて第一等の名譽を贏ち得たのは實に本書の著者であつた。其の着想の微妙、叙述の明快なるは、世に有觸れた翻譯物と同日の論で無い。斯る獨創的な著書の發現は我基督教會の一大慶事といふも敢て過言ではあるまい。全國五千の日曜學校、三十萬の基督教者諸君に此の好著を推薦します。</p>	<p>著者が十有餘年の牧會生活は實に多事多難であつた。其間彼の遭遇した幾多の奇怪なる事件は彼をして幾度か死を庶幾はしめ或は聖職を擲たんとせしめた。然るに運命の手は彼を堅く捕へて常に復活の曙光を仰がしめれば止まなかつた。狂人、悪人、聖人、凡人、美しき信、悼ましき死、徹底せる大悟、悲痛なる反抗、實に曲折波瀾に富んだ著者の心血録である。</p>	<p>米國に於ける新神學者中最も常識に富み獨創の見を有するアウトロック主筆ライマン・アボット氏の原著の翻譯にして基督教の立場より生と死との二大問題の根本義を闡明せるもの附録として「神人モーセの死」以下四篇を添ふ警醒叢書の第一編とす。</p>

◇ 著 磨 德 永 富 ◇

<p>傳道用小子冊</p>	
<p>基督教の神髓 定價八十錢 送料八錢</p>	<p>基督の徒の思想 定價八十錢 送料八錢</p>
<p>基督教の信仰 一冊八錢 送料二錢</p>	<p>聖書を讀む鍵 一冊八錢 送料二錢</p>

□目書刊新店書社醒警□

賀川豊彦著
精神運動と社會運動
菊判七百二十頁
定價參圓
送料十八錢

ベイトン著 携帶に便
山崎馨譯
食人島の曙
ポケット型二百七十七頁
定價八拾錢
送料六錢

理學博士 松村松年著
新日本千蟲圖解
四六二倍判七百十二頁
定價九拾五錢
送料十八錢

有島武郎共著
森本厚吉著
リビンググストン傳
四六判二百二十八頁
定價九拾五錢
送料六錢

優秀なる新人の出現!!
關西地方に於ける思想界、宗教界、及び勞働界の事物がこの新人の活動を中心として進展せるもの甚だ多きは眞に顯著なる最近の現象たり。本書は即ち氏の斯くの如き活動が文學の上に印刻されたもの「精神運動と社會運動」實に是れ氏の人格と理想との凝結せる所にして又實に現代人の二大焦點たり、進めば社會各方面の熱望に投ずるを得ん。

近世の外國傳道者中事實は小説よりも奇なりといふ言葉を最もよく實地に示したものであるといふ評があるかのベイトン氏の「ダンナ島傳道記」を譯したものである單身食人種の間に入り込んで風前の燈火の如き生活の中に忍耐不拔十字架の教の宣傳に従ふ聖生活の記録は現代に對する一服の清涼劑といふ可きである。

日本及日本領土に産する蝶類の總數は四百三十八種なり。本書には其の内の二百七十二種と二十八種の圖版とを以て説明せり。更に附録として正日本千蟲圖解第四卷に記載せざりし蝶種及び新種を記入して追補とせり。本書には太北海道本州四州九州朝鮮沖繩及臺灣の八分布區に産する蝶類の分布表を添附し、序に新領土南洋諸島の蝶類と産する蝶類とを以て最も完全なるものと確信す。

十數年前二人の著者が共に尙ほ札幌農學校時代であつた頃始めて出版した著述である其の第四版を新に出したのであるが此の新版に於て特に興味あるのは卷頭に二人の著者が別々に其の信仰に對する告白文を書いた事である青年時代に於ける宗教的熱誠に驅られた心熱と幾多の世波を閲覽し來りて極めて眞面目になつた中年時代の信仰とを併せて寫す事が出來た點にリビンググストンの傳其物以外に一種の意義を持つた出版だといふ事が出來ると思ふ(東京日日)

□目書刊新店書社醒警□

アサーン教授著
野本稔譯
最近日曜學校論
四六判二百十六頁
定價壹圓參拾錢
送料八錢

田村直臣
子供の心理
四六版二百五十六頁
定價九拾錢
送料六錢

今井三郎著
社會運動と民主思想
四六判二三三頁
定價九拾錢
送料六錢

細井柳汀著
ウイルソンとデモクラシー
四六判二百五十六頁
定價壹圓
送料六錢

米國宗教界のオースリチーにしてボストン大學校教育學講座擔任の新進教授にして獨創の見地を拓けるアサーン博士の著書を傾むけたる名著「チャーチスクール」譯出せらる。蓋し本書の出版は舊來の我國日曜學校教育に對する改革の叫びにして又之に對する挑戰なり。

著者は長く兒童の心理や又其の宗教教育の問題に意を用ひ多くの書籍を蒐集して研究を積んだ人である。其結果を何人にも解し得らるゝやう系統に拘泥せず實際に就いて説明せるは此の書である。曰く習慣曰く注意曰く疲勞曰く潜在意識、十七章に亘りさま／＼の方面を面白く説明して行に少くとも此れだけの知識はもたせたいものである
(文明評論)

本書は、曩に公にして異常の好評を受けたる「宗教と民主思想」の姉妹篇なり刻下必讀の書たるべきは言を俟たず

デモクラシーと言へばウイルソン、ウイルソンと言へばデモクラシーを聯想する程縁故の深い間柄である。著者は其處に立脚して詳細に渡り研究的態度で書いたものである。或る一面から見れば恰好のウイルソン傳であるとも言ひ得る。「世界はデモクラシーによつてこそ永遠に平和たるべし」との叫びに筆を起し實業、宗教、時代思想、國家觀念等に觸れ日米問題に至りて筆を止る。ウイルソンの主唱が多の誤解を招ける今日此書の出る決して無意義なることではない。

□ 警 醒 社 書 店 新 刊 書 目 □

ラルネ博士講述
大宮季貞筆録

改新約約翰傳講解
四六判八百五十一頁
定價貳圓八拾錢
送料十八錢

内村鑑三著

人道の偉人

菊半截四十頁
定價拾錢
送料二錢

五十册以上
九錢の割

内村鑑三著……編纂者 内村鑑三
内村賢造

内村全集(第壹卷)

四六判六百三十二頁
定價貳圓五十錢
送料十八錢

内村全集(第貳卷)

十月月上旬發行

新約聖書の改訂は既に成り同改訂委員の一人たるラルネ博士は既に講述されたる「新約聖書講解」を更に改訂文によりて改訂を加へられ、今や約翰傳の講解より出版されんとす。抑基督傳研究者の最も興味あるものはヨハネ福音書なり。本福音書は其觀福音書とは全然その趣を異にしその類を同うせざるもの實に主イエスキリストの理想史とも云ふべきなり。されば其觀福音書によりイエスの言語動作を識り、更に進んで約翰福音書により、イエスの性格を知り、キリストの人物に接觸するこれ自然の順序なり、乞ふ先づ本書を座右に備えられんことを。

身をボーイより起して米國有数の富豪となり、犠牲献身の精神を以て不幸なる、されど高貴なる一生を送り、一切の産を公共事業に投じて世を去りし稀有の大人格を描く。基督を敬義と外形とに於て信ぜずして而も基督の聖訓に則る生涯を營みたる、かれデラードのライフは人道の偉人のそれとして人を教ふること少からざるべし。蓋し贈答品として絶好のものなるべし、廣く使用せられんことを望む。

先生の筆が明治大正の基督敎界に於て特異の地位を占め其の永遠的價値の豊なるものあるは多くの人の疑はざる處なり、而して其の永遠的價値を恒久的形式の中に包むは最も緊要の事に屬す。本社茲に見る所あり今回先生に乞ふて其全集を出版せんとす乃ち先づ既刊の著書に充分の改訂修正を加へて面目一新せる外全集として保存するに適すべく表装の堅牢と體裁の質實と校正の嚴密とを期せり。

内 容

(地人論改め) 地理學考

興國史談

コロンブスと彼の功績

324
608

終

